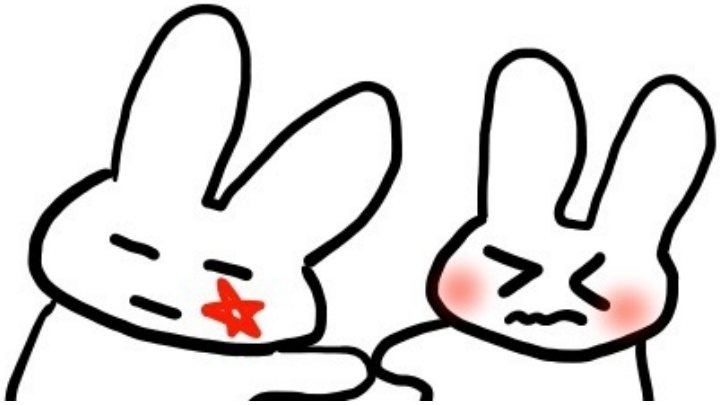
星のクーたん

ジェニュイン黒田



目次

星のクーたん

第一章　遭遇

第一話　今はとても小さくて曖昧な世界
第二話　ある晴れた春の日
第三話　自らの意志で枝を踏んだ日
第四話　初めておにぎりを食べた日
第五話　私がウサギになった日
第六話　初めて傘をさした日
第七話　私が私になった日

第二章　遊歩

第八話　クーたんとクローバーの丘に行った日
第九話　クーたんとだがしうましに行った日
第十話　クーたんと月饅頭屋に行った日
第十一話　クーたんと自転車に乗った日
第十二話　クーたんと水鳥を見た日
第十三話　クーたんに大好きって言えた日

第三章　奪兎

第十四話　初めてあの小さなウサギを見た日
第十五話　あまり思い出したくない日
第十六話　執念というものを知った日
第十七話　クーたんとヒソヒソ話をした日
第十八話　あの子の名前が決まった日
第十九話　～とある小さなウサギの回想～
第二十話　初めてはなびをした日１
第二十一話　初めてはなびをした日２
第二十二話　はじめてはなびをした日３

最終章　星兎

第二十三話　とても長い一日１
第二十四話　とても長い一日２
第二十五話　とても長い一日３
第二十六話　とても長い一日４
第二十七話　とても長い一日５

第二十八話　とても長い一日６
第二十九話　とても長い一日７
第三十話　さようならを言った日１
第三十一話　さようならを言った日２
第三十二話　さようならを言った日３
第三十三話　さようならを言った日４
第三十四話　旅立ちの日１
第三十五話　旅立ちの日２
第三十六話　またね

第一話　今はとても小さくて曖昧な世界

「お別れしなくちゃならないんだ。」

　第一章　『遭遇』

　いつなのかわからない時、どこなのかわからない場所。たぶん小さな星の小さな国なのだろう。たぶん小さな町の小さな家なのだろう。

　懐かしいといえば懐かしく、新しいといえば新しい。このなんとも曖昧な世界は、今はとても小さくて、そしてどこか優しい。

　その小さな家の中に、白くてもこもこしている何かが住んでいる。マシュマロみたいにフワフワで、さわればときっと柔らかい。

　頭から二つ伸びている、みょーんと長いものはたぶん耳で、常にひくひくと敏感に動いている。

　小さな家に住んでいるその何かは、おそらく私たちの世界の言葉で表現すればウサギと呼ばれることになるだろう。

　テクテクと二足歩行をしていることに目をつむりさえすれば。

　その、とりあえずはウサギと呼ぶのがふさわしいであろう生き物は、イスに座って、ほおづえをついている。テーブルの上のマグカップの中には茶色くて良い匂いのする飲み物が入っている。どうやらココアのようだ。この不思議なウサギは甘いものが好きらしい。

　ウサギが窓から外を見ると、今日も雨が降っていた。ウサギは大きな雨粒が小さな家の屋根を打つ音に耳をピクピクさせている。

　庭に植えてある大きな木の葉っぱが雨に打たれている姿は、どこか泣いているようにも見え、ウサギは悲しい気持ちになってしまう。

ウサギ「雨は嫌。」

　ウサギはポツリとつぶやいて、ため息をつく。ここのところ、ずーっと雨。考えてみると、その前の日も、その前の前の日も雨だったような気がしてくる。ウサギは自分は一体いつからこの家から出ていないのだろう、と心配になった。

　時折ゴウッと強く吹く風の音があまりにもウサギを不安にさせるので、ウサギは今日も途中で考えることをやめて、おふとんを頭にかぶって寝てしまった。

　昨日はいつ終わり、今日はいつまで続いて、明日はいつから始まるのだろう。そんな当たり前のことすら今は必要としていない、とあるウサギの出会いと別れのお話。

第二話　ある晴れた春の日

　ある春のとき、いつの間にか外は晴れていた。

　ウサギは歩くのが好き。走るのも好き。ウサギの日常には考えてもわからないことばかりがあふれているが、好きだというこの気持ちだけは、考えなくてもはっきりとわかる。だから外が晴れているのなら、いつもスタスタと二足歩行で歩くし、いつもタカタカと二足歩行で走る。

　ウサギの行動に特に目的は必要なかった。今日が晴れているなら、ただ歩き、ただ走る。それで充分。その日も歩くために歩いていたし、走るために走っていた。

　ウサギはいつもどこを目指して行くかは決めていない。前と同じ道を通ることもあれば、違う道を通ることもある。全ては気の向くまま、身体の向くままである。その日は、とても久しぶりに、小さな山の頂上へ向かう道を走っていた。

ウサギ「ビクッ！」

　気持ちよく山道をグルグル走っていたウサギは何かに気づいて、ピタッと足を止める。ウサギが遠くに見えてきた山の頂上をジーっと見ると、そこに何かが座っているのだ。ウサギはドキドキしながら、用心深く様子をうかがう。

ウサギ「何か･･･いる？」

　ウサギは少しずつ慎重に山の頂上に近づきながら、目を凝らして、その何かを見つめた。

　白くてもこもこしている何か。マシュマロみたいにフワフワで、さわるとたぶん柔らかい。そんな何かが山の頂上に座っていた。頭から二つ伸びている、みょーんと長いのはたぶん耳で、敏感にひくひくと動いている。小さな山の頂上に座っているその何かも、おそらく私たちの世界の言葉で表現すればウサギと呼ばれることになるのだろう。

　しかしその山の頂上に座っている何かをおそるおそる見つめているこのウサギは、まだ自分以外のウサギと遭遇したことがない。だから自分がウサギであるということもよくわからないし、相手が自分と同じウサギであるということもよくわからない。

　臆病なこのウサギは、今までいなかったものと接触するのがすごくこわかった。

　このまま回れ右して、山を下りて他の道を進んでいけば何事もなく、これまで通りのウサギの日常に戻れる。

ウサギ「何もいなかったことにしようかな。」

　ジワリジワリと山の頂上付近まで歩いてきてしまっていたウサギは、クルリと方向転換をして、そのままソロリソロリと来た道を引き返そうとする。

　バキッ！

ウサギ「あっ。」

　その時、思いがけず落ちていた大きめの枝を踏んづけてしまったウサギ。それなりの大きな音を立ててしまった。

？「うん？」

　山の頂上に座っていた何かが、その音に敏感に反応し、ウサギの方を見る。

ウサギ「ギクッ。」

？「･･･やあ！」

　その何かはその場に立ち上がり、山の上からちょっとだけ手を振って、大きな声でとても簡単にあいさつをした。

ウサギ「あっ･･･。」

　ウサギはびっくりして硬直してしまう。

？「こんにちは。初めまして。自分と同じ、耳の長い、白い毛のウサギさんだね。」

ウサギ「ウ･･･サギ？」

　ドキドキしてしまっているウサギが微かに聞き取れたのは、その「ウサギ」という言葉だけだった。

　そして気がついたときにはウサギは、来た道をタカタカと走って戻ってしまっていたのだった。

？「行っちゃった･･･。あのウサギさんと仲良くなれるといいなぁ。」

　あいさつも返さずに、急に走り去ってしまったウサギを見送った何かは、手に持っていた白い三角を大事に抱えながら、その場に寝ころび、ワクワクしながら空を見上げた。

　一方、急いで逃げ帰ってきてしまったウサギの方は、いつもより短い道のりで家に着いてしまったので、時間を持て余し、退屈になってしまっていた。

　退屈になると忘れたいこと、なかったことにしたいことも思い浮かんでしまう。

　ウサギは自然とさっき遭遇した何かのことを思い出していた。

ウサギ「あれは、何だったんだろう･･･？」

　ちょっと離れたところから見た何かの姿。

　白い毛、長い耳、ほっぺたには特徴的な赤い星に見える模様が見えた。そしてなぜかとても興味をそそられる白くて三角の物を手に持っていた。

ウサギ「ウ･･･サギ･･･星･･･ウサ…ギ？」

　ウサギはやることがないので早々におふとんをかぶって寝てしまおうと思ったが、その日の夜はドキドキしてなかなか眠れなかった。

第三話　自らの意志で枝を踏んだ日

　それから何日か後の、とある晴れた日。ウサギは今日も、何も考えずに、歩いたり走ったりしようと思って出かける。今日も特に行先を決めずにどんどん走る。しかし、たまたま足の向いた今日のこの道は、あの何かと遭遇した山の頂上への道につながっていそうだ。

ウサギ「違う道にしておこうかな･･･。」

　いつも気の向くまま、身体の向くままに道を進んでいる。気にかかることがあるからといって、自分の今日の道を変えるのも何だか悔しい。ウサギは考えるのをやめて、そのまま進み続けることにした。

ウサギ「あっ。」

　山の頂上には、このあいだ遭遇した何かがまた座っていた。

　しかし、今日はウサギの身体は止まらなかった。ずんずんと山の頂上への道を進み、その何かに近づいていく。ウサギは早くも遅くもない速度で進み、何かが座っている山の頂上付近に到達。

　あの何かはまだこちらに気づいていない。そこで今日も足元に転がっている大きめの枝をジーッと見つめるウサギ。

バキッ！

　今日は自らの意志でその大きめの枝を踏み抜いた。

　山の頂上に座っていた何かが、その音に敏感に反応し、もう、すぐ近くまで来ていたウサギの方を見た。

何か「やあっ。」

　何かはこの前と同じようにヒラヒラと手を振って、大きくも小さくもない声でとても簡単に挨拶をした。

　ウサギはズンズンと何かに近づき、何かの目の前でピタッと止まる。

ウサギ「あ、あ、あ、あなたは誰ですか？」

　突然ウサギが、震えた声でその何かにたずねる。

何か「･･･。」

ウサギ「こ、こ、こわい何かですか？」

何か「こわい何かではないよ、たぶん。」

　ウサギは注意深く、その何かを隅から隅まで見つめる。そして、その何かが手に持っている白い三角の物に目がいくと、そこで目が釘付けになった。

何か「･･･うん？」

ウサギ「それは何ですか？」

　ウサギは真っ直ぐ白い三角の物を指さし、何かにたずねる。

何か「これかい？これはおにぎりだよ。」

ウサギ「おにぎり･･･。」

何か「そう。ふふふっ。」

ウサギ「ウ･･･サギ･･･星･･･星ウサギ･･･おにぎり･･･。おにぎりー！」

　何かの返答を聞き、ブツブツと独り言をつぶやいたウサギは、急に叫び声をあげ、また、タカタカと逃げるように走り去ってしまった。

何か「あれ、あ･･･。またね。」

　その山の頂上に座っている何かは、ちょっと残念そうに小さくつぶやき、走り去るウサギの背中を見送りながらヒラヒラと手を振った。

　ウサギは家に帰り、いつものようにマグカップでココアを飲んでいた。

ウサギ「よくわからないけど、あの何かはこわくない･･･かもしれない。」

　ウサギはよくわからない不思議なワクワク感を感じていて、なんだか今日は気持ちよく眠れるような気がしていた。

第四話　初めておにぎりを食べた日

　晴れたある日、ウサギは今日も走っていた。いつだって気ままに行き先を決めずに走っていたウサギだが、今日は初めて、あの何かに会いたいという期待をもって昨日と同じくらいの時間に、昨日と同じ道を歩いていた。

ウサギ「あの何か、いるかな。」

　ウサギが走っていくと、山の頂上の道の先に、昨日遭遇した何かがまた座っていた。

　ウサギは何かと接触するために、今日も丁度良い大きさの枝が落ちていないかと一生懸命探した。

何か「やあ！」

ウサギ「ビクッ！」

　なかなか丁度良い枝が見つからなかったので、今日はウサギの方が先に何かに見つかってしまった。

　ウサギはスタスタと歩き、何かの隣のちょっと離れたところに座る。

ウサギ「あの･･･。今日もおにぎりですか？」

何か「うん。今日もおにぎりを持っているよ。」

ウサギ「おにぎりはなんですか？」

何か「おにぎりはなんですか･･･か。うん。おにぎりはね･･･おいしい食べ物だね。」

ウサギ「おいしい食べ物･･･。」

何か「ふふっ。自分はいつも二つ持っているんだ。ひとつあげるよ。」

　ウサギは思いがけぬ何かの発言にとてもびっくりして、逃げ出したくなったが、優しくおにぎりを手渡されると、なぜか幸せな気持ちになった。

　何かはさっきよりほんの少しだけ、ウサギの近くに座り、おいしそうに幸せそうに自分のおにぎりをほおばっていた。

　ウサギはそんな何かを横目で見ながら、意を決して、パクリとおにぎりをほおばる。

ウサギ「･･･。」

　思ったよりもおにぎりは地味な味だった。だけど、どこか優しくて元気が出るような味だった。

ウサギ「･･･！」

　その時、ウサギの身体をピリッとした刺激が突き抜ける。

ウサギ「す･･･すっぱ！」

何か「あ、ごめん。梅干しだめだったかい？」

　ウサギは初めて食べる梅干しの刺激に、表情を歪め、立ち上がる。

ウサギ「すっぱ！すっぱ！」

何か「あわわ、あわわ。」

　ウサギの反応に何かもとても慌ててしまう。

ウサギ「ココア、ココアー！」

　ウサギは梅干しのすっぱさにどうしても甘いものがほしくなって、食べかけのおにぎりを大事に抱えたまま、その場をグルグル回ったあと、タカタカと走り出してしまう。

　だけど、ちょっと走ったところでピタッと止まり、何かの方にクルっと振り返る。

ウサギ「ありがとう。」

何か「･･･！･･･ありがとう。またね。」

　ウサギは梅干しのすっぱさに涙を流しながらニッコリしたあと、また一目散に走り出した。

何か「友達に･･･なれるかな･･･。」

　何かはニッコリ笑って小さくつぶやき、走り去るウサギの背中を見送り、ヒラヒラと手を振った。

第五話　私がウサギになった日

　またある日、何かは今日も山の頂上に向かって歩いていた。

何か「今日も会えるかな。」

　いつからか、朝の修業と昼の修業の間の短い時間、日当たりの良い山の頂上でおにぎりを食べるのが習慣になっていた。

　その山の頂上で、ちょっと前から自分とは違うウサギに出くわすようになった。何かはそのウサギと会ってお話しするのをとても楽しみにしていた。

　期待に胸を膨らませながら何かはいつも通りおにぎりを二つ布袋に詰めて、スタスタと山への道を歩いた。

何か「おっ。」

　山の頂上にはすでに一羽のウサギが座っていた。

　何かがウサギにどう声をかけようか迷っていたら、

ウサギ「大きい枝そこにあるよ。」

　ウサギは親切に教えてくれた。

何か「ふふっ」

　何かは少し笑って、

　バキッ！

　大きめの枝を踏み抜いた。

ウサギ「やあっ！」

何か「やあっ。こんにちは。」

　何かはウサギのすぐ隣に腰かけた。

　そして何かはゆっくりと布袋からおにぎりを出す。

何か「今日もおにぎり二つ持っているんだ。一緒に食べよう！」

ウサギ「じゃーん！」

何か「うわっ！」

　肩にかけてきた水筒をすごい勢いで何かに見せるウサギ。びっくりして何かはひっくり返りそうになる。

何か「おっとっと･･･山から転げ落ちちゃうところだった。それはなんだい？」

ウサギ「ココア！」

　ウサギの目はキラキラと輝いている。

何か「ふむ。ココア･･･。」

ウサギ「知ってる？ココア。うんと甘いやつ。」

　ウサギの目の輝きは増すばかり。

何か「うん･･･。本で読んだことはあるよ。だけど、飲んだことはないな。」

　ウサギは持ってきたマグカップにアツアツのココアをそーっと注ぐ。

ウサギ「あい！」

　ウサギこぼさないように、でも元気よくマグカップを何かに渡す。

何か「おお。ありがとう。」

　湯気の立ち昇るマグカップを受け取り、何かは火傷しないようにゆっくりと、ひとくちココアを飲む。

何か「うん･･･。甘いねぇ。」

ウサギ「うふふふ。甘いねぇ。」

　何かはとにかくキラキラと嬉しそうにしているウサギを見ながら、ココアの甘さに幸せな気持ちになっていった。

何か「今日はおにぎりの具を二つともシャケにしてきたんだ。」

ウサギ「シャケ･･･。」

何か「うん、おいしいよ。」

　何かは優しくウサギにおにぎりを渡す。

　ウサギは躊躇なくおりぎりをパクリとほおばる。相変わらず地味だけど、どこか優しくて元気の出る味だった。

ウサギ「ふむむ。」

　ウサギの二口目はおにぎりの中のシャケに到達した。シャケの塩気はお米の優しい甘みを引き立て、ウサギに十分な旨味を与えてくれた。

ウサギ「おいしいね。」

何か「おいしいね。」

　二羽はゆっくりとおにぎりを味わって、幸せな時間を過ごした。

ウサギ「ウサギ･･･星･･･ウサギ･･･。」

　ウサギはボソボソとつぶやいた。

何か「うん？」

ウサギ「私は･･･ウサギ？」

何か「そうだね。白くて耳の長い、可愛いウサギさんだね。」

ウサギ「ウサギ･･･。私は可愛いウサギ？･･･あなたもウサギ？」

何か「うん。自分もウサギ。自分は星ウサギ種っていう種類のウサギなんだ。」

ウサギ「星ウサギ･･･。星、ついてるもんね。ほっぺに。」

星ウサギ「うん。星ウサギ種は身体のどこかに星のマークが必ずあるんだ。」

ウサギ「私も･･･星ウサギ？」

星ウサギ「身体のどこかに星のマークは入っているかい？」

　ウサギはブンブンと首を横に振る。

星ウサギ「ないんだね。それじゃ、星ウサギじゃないかもね。」

ウサギ「そか･･･。」

星ウサギ「この世界にはいろんな種類のウサギがいるからね。・・・さて、自分はもう行くね。」

ウサギ「あ、うん・・・ありがとう。」

星ウサギ「こちらこそ、ありがとう。またね。」

　星ウサギはウサギに向かって小さく手を振ってスタスタと山を下りて行った。

ウサギ「私はウサギ･･･なのか。何ウサギ･･･なのかな･･･？」

　ウサギはボンヤリと空を見上げながら、呟いた。

第六話　初めて傘をさした日

　何日かが過ぎ去った後のとある日のこと、その日は雨だった。

ウサギ「雨は嫌。」

　ウサギはココアを一口飲んではテーブルに突っ伏し、一口飲んでは突っ伏しを繰り返していた。

ウサギ「はふーっ。」

　ウサギは、雨にシトシト濡れている木の葉を窓から見るたびにため息がでてしまう。

ウサギ「雨でも星ウサギさんいるのかな？」

　雨音を聞きながら天井を見上げていると、ふと頭にそんな言葉が浮かび、それがそのままウサギの声になった。

　急に好奇心が湧いたウサギは、不意に立ち上がり、家のドアをバーンと開けて、雨の中をタカタカと走り出していた。

　いつもの時間、いつもの山道。地面は雨で少し滑りやすくなっていたが、ウサギは上手に走っていた。

　いつもの山の頂上。今日は星ウサギは座っていなかった。ウサギはガッカリとしてしまったが、とりあえず星ウサギに遭遇すべく、近くに落ちていた枝を踏んでみた。

　バキッ！

　しかし星ウサギの声は聞こえてこない。

　それでもウサギはしばらくの間、雨の降る山の頂上で、なんとなく星ウサギを待っていた。強い雨ではなかったが、ウサギは上から下まで雨で濡れてしまっていた。

ウサギ「星ウサギさんも雨は嫌いなのかな･･･。」

　ウサギは何だか寂しい気持ちになってきてしまった。

ウサギ「お腹減った･･･。」

　走る元気もなく、とぼとぼと山の頂上を去ろうとするウサギ。ちょっとフラっとした拍子に、さっき踏んだ枝をもう一回力強く踏んでしまう。

　バキッ！

星ウサギ「やあ！」

ウサギ「！？」

　びっくりして振り返ると、そこには傘をさした星ウサギが立っていた。

星ウサギ「今日は雨だから座っては食べられないけど、おにぎりいるかい？」

　黙ってうなずくウサギ。星ウサギはゆっくり布袋からおにぎりを出して、ウサギに優しく渡した。

星ウサギ「今日はオカカを入れてみたんだ。おうちで食べてね。」

　ウサギはまた黙ってうなずき、雨で濡れてしまわないように両手で大事におにぎりを抱える。

星ウサギ「大分雨に濡れてしまったね。」

　しばらく雨にうたれて、上から下まで濡れてしまっているウサギを見ながら、星ウサギはつぶやく。

星ウサギ「はい。どうぞ。」

　星ウサギがさしている傘をウサギにわたそうとする。

　ウサギは傘を初めて見るが、なんとなくそれは雨を避けるための道具であり、なんとなくそれをウサギに渡してしまったら、星ウサギが雨に濡れてしまうことがわかった。

ウサギ「あなたが濡れちゃうよ。」

星ウサギ「自分は大丈夫。家もそんなに遠くないから。」

　星ウサギはそう言って、わりと強引にウサギに自分のさしている傘を渡す。

星ウサギ「じゃあ、またね。」

　そそくさと走り去ろうとする星ウサギ。

ウサギ「あの！」

星ウサギ「うん？」

　初めて傘をさしているウサギが星ウサギを呼び止める。

ウサギ「あなたは、雨は嫌ですか？」

星ウサギ「雨ねぇ･･･。」

　雨にうたれながら、空を見上げて少しだけ星ウサギは考える。

星ウサギ「自分は･･･好きだよ、雨も。」

　星ウサギはそう言って、ニッコリ笑い、そして去っていった。

ウサギ「私も･･･好きになれるかな･･･雨。」

　星ウサギを見送ったあと、ウサギはボソッとつぶやき、少しだけ遠回りして家に帰った。

　家に帰り、身体をタオルでゴシゴシと拭いた後、ウサギはさっそく星ウサギにもらったおにぎりを頬張る。するといつもの地味で優しい味がする。

ウサギ「むむむ。」

　ウサギの二口目はオカカに到達した。オカカはしょっぱい、甘いの二重構造で、とにかくお米の部分をどんどん食べたくなった。

ウサギ「あっという間だ。」

　ウサギは一気に食べきってしまった。

　玄関には、たたみ方のわからない傘が開いたままで置いてある。改めて見てみると、青い傘には大きな黄色の星のマークがついていた。

ウサギ「雨の日は枝を二回踏めば星ウサギさんに遭遇できるんだな。」

　ウサギは今日も何だかよく眠れるような気がしてちょっと幸せな気持ちでおふとんをかぶった。

第七話　私が私になった日

　次の晴れた日。ウサギは今日も星ウサギに会いに、山への道に向かって走っていた。しばらく雨が続いたので、まだ返すことができてない、広がったままの傘を持ち、走る、走る。

　しかし、今日はどこかおかしい。

　いつもなら、気持ちよくタカタカ走れるのに、今日はなんだかノソノソとしか走れない。

ウサギ「なんでだろう？」

　ウサギは首を傾げる。

　広がる傘に風の抵抗をいっぱいに受けながら、ウサギはいつもより体に力を入れて、頑張って走った。

　少し遅くなってしまっていたが、今日も星ウサギは山の頂上に座っていた。

星ウサギ「やあ。」

ウサギ「やあ。」

星ウサギ「今日はちょっとのんびりだね。」

ウサギ「今日は、何だかタカタカ走れなかったんだ。」

星ウサギ「そう、今日は何だかタカタカ走れなかったんだね。」

ウサギ「はい、これ。」

星ウサギ「ああ傘だね。」

ウサギ「ありがとう。おかげであの日の帰りは雨に濡れなくてすんだよ。」

星ウサギ「どういたしまして。」

ウサギ「雨が･･･。」

星ウサギ「うん？」

ウサギ「傘をさしたら、雨が･･･ちょっとだけ嫌じゃなかった。」

星ウサギ「ふふっ。それはよかったね。」

　優しく微笑んだ星ウサギは、スッと傘をたたみ、クルクルっと小さくした。

ウサギ「わっ、そんなに小さくなるのか、傘。」

星ウサギ「ふふっ。たたまないと風で飛ばされちゃうからね。」

ウサギ「飛べるのか！傘。」

星ウサギ「ふふふっ。」

　ウサギは星ウサギの一言一言に新鮮な驚きを見せる。

ウサギ「今度ちゃんとお礼するね。」

星ウサギ「ふふ。気持ちだけでいいよ。さあ、ちょっと遅くなっちゃったけど、おにぎりを食べよう。今日も二つ持ってきたよ。」

ウサギ「今日、お茶持って来たんだ。」

星ウサギ「おお、ありがたい。」

　星ウサギは優しくウサギにおにぎりを渡し、ウサギは熱々のお茶をそーっと入れたマグカップをこぼさないように星ウサギに渡した。

星ウサギ「今日の具はツナマヨにしてみたよ。」

ウサギ「ツナマヨ･･･。」

　ウサギは元気良くおにぎりを頬張る。いつものように地味で優しい味。

ウサギ「ふむふむ。」

　ウサギの二口目はツナマヨに到達した。ツナとマヨネーズのハーモニーはウサギに十分な旨味を与えた。

ウサギ「あれれ。」

　幸せいっぱいなウサギがもう一口おにぎりを食べようとすると、ツナの油でご飯粒がパラパラして、おにぎりが崩れ始めてしまった。

星ウサギ「あらら、おにぎり崩れちゃったね。ツナの油のせいだね。ツナの油抜き難しいんだよなぁ。」

　ウサギは崩壊していくおにぎりをこぼさないように、一気にサササッと食べきってしまった。

ウサギ「ふう、忙しかった。」

星ウサギ「ふふふっ。良い食べっぶりだね。」

　今日は、星ウサギの午後の修業はお休みだそうで、そのあと二羽で長くお話ができた。

　天気の良い、山の頂上の昼下がり。二羽は汗もかかず、寒がってもいなかった。

　二羽で寝っ転がりながらしばらくのんびりしていると、

ウサギ「星ウサギさん、あなたは誰ですか？」

　急にガバッと起き上がって、ウサギが星ウサギにたずねる。

星ウサギ「･･･？」

ウサギ「こわい何かですか？」

星ウサギ「こわい何かではないよ。たぶん。」

ウサギ「うん。あなたはこわい何かではなかったね。」

星ウサギ「ふふっ。よかった。」

ウサギ「ねぇ、あなたは誰？あなたは誰なんですか？」

　ウサギは星ウサギに向かって繰り返し問う。

星ウサギ「･･･ふふっ。なんだか、君が君自身にたずねているような感じだね。」

　星ウサギは少し笑って言った。

ウサギ「･･･？」

　ウサギは首を傾げている。

星ウサギ「自分は･･･、自分は一体誰なんだろうね。」

　寝っ転がったままで星ウサギは応える。

星ウサギ「自分でも、自分が何者かなんてわからないんだよ。どこから来て、どこに行くのかもね。」

ウサギ「そうなのか･･･。」

星ウサギ「ウサギさん･･･。君は誰ですか？」

　今度は星ウサギがウサギに聞き返す。

ウサギ「わ、私は、ウ、ウ、ウサギです。」

星ウサギ「ふふっ。そうだね、君はウサギだね。自分もウサギだ。」

ウサギ「あなたは星ウサギだよね。私は何ウサギなんだろ･･･？」

星ウサギ「ふむ･･･。実はこの前、家にある本をいっぱい見て、調べてみたんだけど、君が何ウサギかっていうのが結局わからなかったんだ。」

ウサギ「･･･ううっ。」

星ウサギ「なんかね、本当に調べれば調べるほど普通のウサギだった。特に特徴のない、普通のウサギ･･･。」

ウサギ「･･･フツウのウサギ。」

星ウサギ「うん･･･。」

ウサギ「･･･。」

星ウサギ「･･･なんかごめんね。」

　しばらくうなだれている二羽のウサギ。

ウサギ「･･･クーたん！」

星ウサギ「？」

ウサギ「お互いに名前を付けようよ。あなたの名前はクーたんね！」

星ウサギ「クーたん？自分は、星ウサギだよ？」

ウサギ「それは、あなたの種族の名前でしょ。そうじゃなくて、あなただけの名前、クーたん！」

星ウサギ「自分だけの名前･･･クーたん･･･。」

ウサギ「そう、クーたん！あなたどこかクールだから、クールのクーたん！うふふ。素敵、素敵。」

星ウサギ「クールのクーたん･･･。ふふっ。素敵だね。そんな素敵な名前をもらってもいいのかい？」

ウサギ「いいよ！いいよ！クーたん！クーたん！」

クーたん「ありがとう、今日から自分は、クーたんになるね。」

　クーたんはとても嬉しそうに、そして照れくさそうにしていた。

クーたん「それじゃ、君にも名前をつけよう。何がいいかな？」

　クーたんは腕をくんで、考える。

ウサギ「えっと、私は、ウサギ、フツウのウサギ･･･。」

クーたん「ウサギ、普通、フツウ、ウサギ･･･それじゃ、フツウサっていうのはどうだろう？」

ウサギ「フツウサか、うふふ。いいね。カッコいい名前だ。」

クーたん「よし、じゃあ、今日から君はフツウサだ！」

フツウサ「やったー！フツウサ！フツウサ！私は、フツウサ！」

　小さな山の頂上で、二羽のウサギの元気な声が響いていた。

　いつなのかわからない時、どこなのかわからない場所。たぶん小さな星の小さな国なのだろう。たぶん小さな町の小さな家なのだろう。その家から走ってけっこう行ったところにある山の頂上で座って、ニコニコ話をしている不思議な二つの生物。

　白くてももこもこしている何か。マシュマロみたいにフワフワで、さわるとたぶん柔らかい。頭から二つ伸びている、みょーんと長いのはたぶん耳で、敏感にひくひくと動いている。おそらく私たちの世界の言葉で表現すればウサギと呼ばれることになるだろう。

フツウサ「クーたん！」

クーたん「なんだい？フツウサ。」

　興奮冷めやらぬフツウサがクーたんに問う。

フツウサ「フツウってなに？」

クーたん「･･･！？」

フツウサ「･･･？」

クーたん「なるほど、そうあらためて聞かれると難しい問題だな。」

　そんな二羽のウサギの出会いと別れのお話。

第八話　クーたんとクローバーの丘に行った日

「なんで！なんで！知らない！わかんない！クーたんなんて、クーたんなんて、大っ嫌い！」

第二章　『遊歩』

　二羽のウサギが小さな山の頂上で今日も一緒に座っておにぎりを食べている。

クーたん「おいしいね。」

フツウサ「おいしいね。」

　いつの間にか、季節は移り、お日様が頭の上にいる時間は長くなった。クーたんとの遭遇、そして自らの名前が決まったこともきっかけに、ボチボチと他のウサギとの交流も増えてきたフツウサ。しかし、クーたんと一緒に過ごす時間は、相変わらず一日の少しの間だけだった。だけどその少しの時間はフツウサにとって、とても楽しくて幸せな時間だった。

クーたん「さて、もういくね。」

フツウサ「今日も修業に行くの？」

クーたん「そうだね。」

フツウサ「クーたん、修業って、毎日どんなことをしているの？」

クーたん「うーん･･･本を読んだり、座禅を組んで考えごとをしたりだね。」

フツウサ「本を読んで、ザゼン･･･。一羽で？」

クーたん「うん。そうだね。」

フツウサ「それを毎日すると、どうなるの？」

クーたん「うーんとね・・・自分はね、自分が何者で、何を求め、何をやりたがっているのかを知りたいんだよ。」

フツウサ「毎日修業をすると、それが分かるの？」

クーたん「たぶん･･･ね。」

フツウサ「･･･。」

クーたん「じゃあ、またね。」

フツウサ「うん、またね。」

　今日もクーたんは一羽で修業に行ってしまった。

フツウサ「自分が何者で、何を求めて、何をやりたがっているか、か･･･。」

　フツウサはポテッと寝っ転がって、つぶやく。

フツウサ「とりあえずフツウサは、もっとクーたんとおしゃべりがしたいなぁ。」

　フツウサはそう声になったあと、弾けるように起き上がって、いつものようにタカタカと山道を一羽で走っていった。

　フツウサが、花を見たり、虫を見つけたり、川を眺めたり、クネクネ蛇行して走ったりしていると、いつものように空がオレンジ色になってきた。

フツウサ「よし、帰ろう。」

　いつも目的を決めずに走っているフツウサは、自分が今どこに、どういう道筋で走ってきたのかをわかっていないが、自分の家がどっちの方向にあるのかはなんとなくわかる。フツウサが自分の家のありそうな方へと向かおうとすると、

クータン「やあ。」

　聞きなれた声が聞こえた。

フツウサ「あ、クーたんだ！」

クーたん「今から帰るところかい？」

フツウサ「そう、これからおうちに帰るの。」

クーたん「ちょっと一緒に歩かないかい。」

フツウサ「本当に？いいね、いいね！クーたんこれからどこかいくの？」

クーたん「うん。クローバーの丘に取りに行くものがあるんだ。」

フツウサ「一緒にいくよ！」

　フツウサはクーたんと一緒に、嬉しそうに歩き出した。

フツウサ「帰り道に会うなんて珍しいね、クーたん。」

クーたん「そうだね。いつも自分は、修業が終わったら真っ直ぐ家に帰るからね。今日はたまたま用事があったんだ。」

フツウサ「そうなのかぁ。」

クーたん「今日は大分暑い日だったね。フツウサは暑いの好きかい？」

フツウサ「好きだよ。走ってるとクラクラするけどね。」

クーたん「ふふっ、フツウサは元気だなぁ。」

フツウサ「あれ？」

　二羽が喋りながら歩いていると、向こうの方から一羽のウサギが歩いてくるのが見えた。

クーたん「やあ！」

フツウサ「やあ！」

？「あ･･･こ･･･こんにちは･･･。」

　そのウサギは耳がとーっても長く垂れていて、その耳で体全体を覆い隠すことができちゃうウサギ。毛の色は濃い灰色。いつも不安そうにおどおどしていて、自分の耳にすっぽりと隠れている。ロップイヤーという種類のウサギなので、みんなにはロップさんと呼ばれている。

クーたん「これからクローバーの丘に行くんだ。」

ロップ「そう・・・、なんですね・・・。」

フツウサ「ロップさんも一緒に行く？」

　ロップはフツウサの突然の申し出に驚き、サッと長い耳で顔と体を隠し、考え事を始める。

ロップ（（クローバーの丘･･･。私の家とは逆の方向･･･。遠い、こわい、迷子、こわい、暗くなる道、こわい、遭難し

てしまうかもしれない。ああああああ。））

　ロップは顔と体を長い耳で隠しながら、聞き取れないような声でブツブツ何かを言っている。

　クーたんとフツウサは、道から見える小川にプカプカと浮かんでいる水鳥を見ながらロップの返答をのんびりと待っていた。

クーたん「さて･･･そろそろ行こうか。またね、ロップさん」

フツウサ「そうだね、またねロップさん。」

　結構な時間、ロップの返答を待っていた二羽だったが、ついにテクテクと歩いて先に行ってしまった。

ロップ（（ああああああこわい、こわい。でもここで勇気を出せば、仲良くなれるかもしれない。友達になれるかもしれない。でもこわい、こわい。うん、よし、今日は、用事があるといって断ろう。丁寧に断ろう。そうすればあんまり印象も悪くないし･･･。次につながるかもしれない。うん。うん。そうしよう。））

ロップ「あの！」

　ロップが意を決して顔を上げると、そこにはすでにクーたんとフツウサの姿はなかった。

ロップ「ああ、また誰もいない･･･。」

　落胆のため息をついたロップは、また小さな声で何かブツブツと言いながら去っていった。

　クーたんとフツウサはクローバーの丘にやってきた。

　丘に着くとすぐに、一羽のウサギがクーたんとフツウサに話しかけてくる。

？「やあ、クータン。お、今日はフツウサも一緒だね。」

　クローバーの丘で害虫駆除の仕事をしているウサギ。みんなには、かいぞうさと呼ばれていて、本人もその呼ばれ方を気に入っている。顔も体もつぎはぎだらけで左腕には真っ赤な大砲、害虫バスターが取り付けられている。毛の色は身体の半分が濃い灰色で、もう半分が薄い灰色。

　もともとクローバーの丘の管理ウサギだったらしいのだが、何かの事件に巻き込まれたのか、気が付いたらこんな身体になっていたという。本人は、別に痛くもかゆくもないし、仕事にも支障はないから・・と特に気にしていないし、周りのウサギも、彼に何が起こったのかを考えると怖くなってしまうので、もう最初からこういうウサギだったのだと思うようになった。

かいぞうさ「いつものだね？量はどうする？」

クーたん「うん。カゴいっぱい頼むよ。」

かいぞうさ「今月は豊作だから、お代は月末にまとめて三本でいいよ。」

クーたん「ありがとう、助かるよ。」

　この星の経済は大体ニンジン交換で回っていて、物の取引にはニンジンを使って行う。したがってこの星で資産家と呼ばれるウサギは、大きなニンジン畑を持っているウサギということになる。

　ただ、例えばこれを取引するにはニンジンが何本必要、という相場的な感覚にこの星のウサギは疎いようで、取引はそれぞれのウサギ達の間で、かなりファジーに行われているようだ。例えばクローバーの葉をたくさん分けてもらうような取引には、今月はニンジンが三本必要だったが、来月はどうなるかはわからない。

　だけどそれによって誰かがとても困ることも、誰かがとても得するようなこともなく、この星のウサギ達の社会はうまく回っているのだった。

フツウサ「クローバーいっぱいでキレイだなぁ。」

　久しぶりにクローバーの丘に来ることができたフツウサはとてもニコニコしていた。

　クローバーの丘からの帰り道、歩きながらお話ししている二羽のウサギ。

フツウサ「ところで、クーたん。そんなにいっぱいのクローバー何に使うの？」

クーたん「クローバーはね、良質な燃料になるんだよ。」

フツウサ「燃料？」

クーたん「ふふっ。」

フツウサ「クーたん、もらったクローバー･･･三つ葉ばっかりだね。幸運の四つ葉見つからないかなぁ。」

　フツウサは、急に立ち止まって、クーたんが抱えているカゴに手を突っ込んで、四つ葉のクローバーをガサガサ探す。

クーたん「もし、四つ葉が見つかったら、フツウサにあげるよ。」

フツウサ「クーたんいらないの？幸運の四つ葉。」

クーたん「自分はね、三つ葉が好きなんだよ。四つ葉のような珍しい幸運を願うよりも、三つ葉のような当たり前で安心の毎日に感謝ができるようでありたいんだ。」

フツウサ「ふーん。そうなのか。クーたんは、フツウが好きなんだね。」

　フツウサは何か嬉しそうな顔をして、クーたんのカゴから手を引っ込めて、四つ葉を探すのをやめた。

クーたん「ふふ。さて、真っ暗になっちゃう前に帰ろう。」

フツウサ「うん。このまま途中まで一緒に帰ろ！」

　二羽は夕暮れの中、途中まで楽しく一緒に歩いて、それぞれの家に帰っていった。

第九話　クーたんとだがしうましに行った日

　また別の日。今日は雨が降っていた。最近は雨の日はおにぎり山でのクーたんとのランチは素直にお休み。

フツウサ「傘をさしてると、カゼノテイコウってやつで、うまく走れないんだよな。」

　フツウサはクータンからもらった傘をさしてスタスタと歩いて出かけていた。

　雨の日の川はゴウゴウと流れがはやくて、ちょっと怖い。だけどいつもは見られものじゃないから、傘を手に入れてからのフツウサは、雨が降るといつもなんとなく見にきてしまう。

　道にはカタツムリがいたり、カエルがいたり晴れの日とは違う生き物がたくさんいる。

　傘があると、あまり濡れずにそれらを眺めることができるので、フツウサは得意顔だった。

　フツウサが雨の日の日常に夢中になっていると、いつの間にか雨は上がり、辺りが少し薄暗くなってきた。

フツウサ「雨がやんだ･･･。よし、帰ろうかな。」

　いつも通り、ここまでどういう道筋で歩いてきたかはわからないが、自分の家がどこにあるのかはなんとなくわかる。自分でも理由がわからないが、フツウサはこれまで、道に迷ったことがない。

　フツウサが口笛を吹き、たたんだ傘をクルクル回しながら、家に帰ろうとすると、

クーたん「やあ！」

　聞きなれた声が聞こえた。

フツウサ「あ、またクーたんだ！」

クーたん「よく会うねフツウサ。今から帰るところかい？」

フツウサ「そう、雨もやんだし、これからおうちに帰るの。」

クーたん「また、ちょっと一緒に歩かないかい。」

フツウサ「うふふ。いいね！クーたん、今日はどこいくの？」

クーたん「今日はだがしうましに行ってうまいぞうを買おうと思ってね。」

フツウサ「だがしうましだね。一緒に行くよ。」

　フツウサはクーたんについて歩き出した。

クーたん「今日は雨がいっぱい降ったね。」

フツウサ「今日ね、道にね、きれいなカエルがいたんだよ。」

クーたん「へぇ。道にきれいなカエルがいたんだねぇ。それは縁起が良さそうだなぁ。」

フツウサ「クーたん、今日は蒸し暑い日だったね。」

クーたん「うん。蒸し暑い日だったね。」

フツウサ「クーたんは暑いの好き？」

クーたん「うーん、あんまり暑すぎると嫌になっちゃうかなぁ。」

フツウサ「そうなのかぁ。フツウサは暑いの好きだなぁ。」

　二羽がお喋りしながら歩いていると、道の途中で一羽のウサギと出くわす。

クーたん「やあ！」

フツウサ「やあ！」

？「しくしく･･･しくしく･･･。」

　耳がとーっても短いウサギ。毛の色は濃い茶色。とにかくいっつも泣いていて、目は常にウルウルしている。自分でも何が悲しくて泣いているのかわからない。ただただ涙が出て涙が出て仕方がない。みんなには、なきうさと呼ばれている。

フツウサ「これからだがしうましに行くんだけど、一緒にいく？」

なきうさ「しくしく・・・しくしく・・・。」

　なきうさは涙を流しながら大きく頷いた。

　横を川が流れている道の先にある、とても古い佇まいの小さな駄菓子屋“だがしうまし”。

　お店の中にはいろんな駄菓子が置いてある。飴玉や、お煎餅、チョコレートにアイスクリーム。なかでもサクサクした棒状のお菓子、うまいぞうはウサギ達の間でも人気がある。

　この星の経済は大体ニンジンでの物々交換で回っているのだが、この“だがしうまし”だけは、通貨で取引をしている。

この店の主はウサギではないらしいという噂があるのだが、店主がウサギ達の前にその姿を見せたことはない。

この駄菓子屋"だがしうまし"が扱っている通貨は、笑顔コイン。笑顔コインはウサギ達にとても嬉しいことがあって、笑顔になると、どこからかウサギ達の足元に落ちる不思議なオレンジ色のコインである。

駄菓子屋"だがしうまし"の駄菓子を買うにはこのオレンジの笑顔コインが必要だった。

だからウサギ達は駄菓子を手に入れるためには、嬉しいことや、楽しいことを探して、笑顔にならなくてはならないのである。

この日、クータンは笑顔コイン三枚で、うまいぞうを三十本買っていた。

フツウサ「結構買うんだね。」

クーたん「うん。ちょっと多めの備蓄が必要でね。」

フツウサは自分も何か駄菓子を買おうか迷ったが、今日のところは、何も買わずに、ただ店内をグルグルと見まわすことにした。

フツウサ「あれ、なきうさは？」

クーたん「いつものところじゃないかな。」

クーたんとフツウサが店の外に出てみると、なきうさが、ガチャガチャを泣きながら回している。

なきうさ「しくしく･･･ガチャガチャ、しくしく･･･ガチャガチャ。」

足元にはガチャガチャの空のカプセルと、三つ葉のクローバー。そして野菜のキーホルダーがたくさん、たくさん転がっていた。

フツウサ「わぁ、すごい･･･いっぱいだね。」

クーたん「ほんとだ、いっぱいだ。」

駄菓子屋"だがしうまし"の店の前、入り口の脇には昔ながらのガチャガチャが置いてあり、ワンダーと手書きで書かれた紙が貼られている。

このワンダーガチャは、今そのウサギに本当に必要な魔法のアイテムを出してくれることがある、文字通りワンダーなガチャガチャ。

ただし、ウサギが自分で必要だと思い込んでいる物が出るとは限らない。

基本的にはどんな魔法のアイテムが中に入っているかは誰も知らない、不思議な不思議なガチャガチャなのである。

　この不思議なガチャガチャを回すのには涙コインが必要である。

　涙コインとは、ウサギ達にとても悲しいことがあって涙が流れると、どこからかウサギ達の足元に落ちる不思議なコイン。

　笑顔コインは一律オレンジ色だが、涙コインは、涙を流したときの感情の強さによって金、銀、銅とコインの色が分かれる。

　ちなみにワンダーな魔法のアイテムは、ほとんど金の涙コインを使わないと出てこない。

　銀の涙コインだと、あれば便利な日用品が出ることが多い。銅の涙コインだと、三つ葉のクローバーが一枚か、野菜のキーホルダーが一つ出るというのが定番である。

　ちなみにウサギ達はハズレとはいえ、ニンジンのキーホルダーが出るとちょっと嬉しくなるらしい。

　なきうさは泣きながら、たくさんの銅コインでガチャガチャを回し続けている。

なきうさ「しくしく･･･ガチャガチャ･･･しくしく･･･ガチャガチャ。」

クーたん「･･･行こうか。」

フツウサ「そうだね、またね、なきうさ。」

　クータンとフツウサは、夢中でガチャガチャを回し続けているなきうさに挨拶をして、テクテクと歩いて帰って行った。

なきうさ「しくしく･･･ガチャガチャ、しくしく･･･ガチャガチャ･･･あ、ニンジンのキーホルダーが出た。」

　チャリーン

　なきうさが持ってきた、たくさんの銅ばかりのコインに、一枚オレンジ色のコインが新しく加わった。

第十話　クーたんと月饅頭屋に行った日

　またとある日。

　今日もパラパラと雨が降っていた。そしてこの日はとても久しぶりに強い風が吹いていた。

クーたん「強い風だな･･･。」

　テクテクと歩いていくクーたん。山の道には青々と草花が茂っている。

クーたん「こんなに暑いのに、植物は元気だなぁ。」

　昼の修業も終わり、傘を差して歩いているクーたんは今日もどこかへ向かっている。

クーたん「ちょっと山の方を回って行こう。」

　のんびりのんびり歩いて、山の頂上付近にたどり着くクーたん。

クーたん「うん？」

　そのとき、何か聞こえた気がして、ピクピクさせながら耳をすますクーたん。

フツウサ「やーっほークーたぁーん。」

クーたん「やあ。」

　いつものようにヒラヒラと手を振って挨拶するクーたん。視線の先、ちょっと遠くの空には、フツウサがフワフワと空を飛んでいた。

　あれは、フツウサの意志で飛んでいるのだろうか？いや、あれは強い風を傘に受けて飛ばされてしまっているようである。ちょっと楽しそうにも見えるようだが･･･。

クーたん「フツウサ、風に飛ばされちゃってるんだねぇ。」

　落ち着いてつぶやいたあと、クーたんは自分の傘をクルクルと綺麗にたたんで、走ってすぐさまフワフワと風に飛ばされているフツウサを追いかけた。

　ちょっと小高い丘の上からフツウサに向かい、思い切ってジャンプするクーたん。思ったよりも飛距離に余裕はなかったが、なんとか傘とフツウサを捕まえる。

フツウサ「捕まった！」

クーたん「捕まえた！」

　二羽分の重さで、やっとフワフワと地面まで下りてくることができた。

　少しの間、雨をしのぐために、近くにあった小さな洞窟で雨宿りする二羽のウサギ。

　クーたんは、リュックの中に入れて持ち歩いていた星のマークが入った小さなタオルでゴシゴシとフツウサの頭を拭いてあげた。

フツウサ「たんぽぽのタネの気分だったよ。」

　鼻水を流しながらフツウサはニコッとした。

クーたん「ふふっ。ちょっと心配したよ。」

フツウサ「ごめんね。あ、クーたんも拭いてあげる。」

　フツウサは微笑むクーたんからタオルを借りて今度はクーたんの頭をごしごしタオルで拭いてあげた。

フツウサ「クーたん、今日もこれからどこかへ行くの？」

クーたん「うん、今日は、月饅頭屋に饅頭を買いに行くんだ。」

フツウサ「饅頭屋！一緒に行くよ！」

　濡れた体を拭いた二羽は、なかなか止まない雨を待たずに、傘をさして、月饅頭屋に向かって歩き出した。

　月饅頭屋出張所。月に住んでいる月ウサギ達は、月の女王の命令で、月で大量生産している饅頭をいろんな星に出張して販売している。この星に来ている月ウサギたちは、ワゴン車とのぼり旗を使ってシンプルに販売しているようだ。大人気！月饅頭と書かれた紙が貼ってあるワゴン車に、饅頭の入った箱が並べてある。

　店員さんは二名。今日は雨も降っているし、風も吹いているのでお仕事がとても大変そうだ。二羽とも耳までスッポリ被れる専用の販売服を着て作業している。

月ウサギ一「いらっしゃせー！」

クーたん「こんにちは。二箱ください。あとバラで二つ。」

月ウサギ二「ニンジン二本になります。ありがとでーす。」

フツウサ「天気悪い日は大変だね。」

月ウサギ一「いやぁ、販売ノルマがきつくてそんなこと言ってられないっすよ。」

クーたん「あー、ノルマがあるんだね。それは大変だ。」

月ウサギ二「ノルマを達成できずに、月の女王を怒らせたら大変です。ウサギの首どころか、星ごとフッ飛びます

です。」

　二羽の月ウサギは、月の女王の姿を思い浮かべながら、震えたり、涙を流しながら愚痴をこぼす。

フツウサ「うわー月の住民にはなりたくないな。」

クーたん「それじゃ、がんばってください。」

月ウサギ一、二「また是非おこしくださーい！」

　月饅頭屋を後にするクーたんとフツウサ。バラで買った二つの饅頭のうちの一つをフツウサに渡すクーたん。

フツウサ「ありがとう。」

クーたん「この饅頭おいしいんだよ。」

　パクリと頬張るフツウサ。

フツウサ「優しい甘さだね。」

クーたん「優しい甘さだね。」

　二羽は饅頭を食べながら、のんびり歩いておうちに帰っていった。

　雨も風もなかなか止まず、傘をさしていてもフツウサは濡れてしまっていたが、クーたんと食べながら歩く道は、とても楽しく、とても優しかった。

第十一話　クーたんと自転車に乗った日

　またとある日。今日もまだ、とても暑い日だった。

　おにぎり山でクーたんと別れた後、フツウサは今日もいろんなところに走って探検に行く。

フツウサ「ふぅ、さすがに暑いや。」

　いつもより早い休憩。木陰に入って水筒の冷たいお茶を飲む。ポショエットからブルーベリーを出してパクリ。栄養補給をする。

フツウサ「よし、また行こう。」

　フツウサはまたタカタカと走っていった。

　それなりの時間が経過し、お日様がゆっくりと沈んでいった。

フツウサ「よし、そろそろ帰ろう。」

　フツウサが自分の家がありそうな方向に向かおうとすると、

クーたん「やあ。」

　あの声がする。

フツウサ「やぁ、クーたん、あれ？」

　フツウサが声のする方向を見て、挨拶をすると、見慣れたクーたんが、見慣れない何かにまたがっていた。

フツウサ「ク、クーたん！な、な、な、何、それは？」

クーたん「ふふ、これかい、これは自転車さ。」

　得意気に答えるクーたん。

フツウサ「ジテンシャってなに？クーたんそれに乗って空を飛ぶの？」

クーたん「ふふっ、これはね、自転車といって、二つの車輪で、地面をスィーって走るものなのさ。」

フツウサ「ふむぅ。」

　フツウサはおっかなびっくりしながら、クーたんの自転車に近寄り、まじまじと見つめている。

フツウサ「黒いね。」

クーたん「ふふ、ブラックサイクロン号って名前をつけたんだ。だがしうましにおいてあるワンダーガチャで当たった、魔法の自転車なんだよ。説明書には、練習すれば、マッハも出せるって書いてあったんだよ。」

フツウサ「はぁ･･･まっは･･･？」

　興奮して語るクーたんに、フツウサは圧倒されてしまっていた。

クーたん「フツウサ、一緒に乗らないかい？」

フツウサ「いいの？」

　一気にフツウサの目が輝く。

クーたん「うん、昨日本で調べたんだけど、この星では、自転車の二羽乗りをしても大丈夫みたいなんだ。後ろに乗って！」

フツウサ「うん！」

　クーたんの自転車の後ろにピョンと飛び乗るフツウサ。

クーたん「よし、行くよ！」

　ゆっくりと自転車をこぎだすクーたん。自転車は徐々にスピードに乗る。

クーたん「さぁ、スピードあげるよ。」

フツウサ「ぴゅー！フツウサが走るのよりも早いー！」

　二羽は自転車で颯爽と走り抜けていった。

　しばらく自転車で走っていると、

？「やあやあ。」

　後ろから音を立ててバイクが近づいてくる。

フツウサ「あっ。やぁ。」

クーたん「ぜは、ぜは、やあ。」

　バイクに乗っていたのはさいこうさ。毛の色は白。いつもオシャレでキザな風貌。首に巻いた赤いスカーフをなびかせている。自分のことを何かと最高のウサギだと思っていて、その立ち振る舞いは、優雅。今日は自慢のバイクでツーリングしているところだったよう。

さいこうさ「自転車の二羽乗りとは仲が良いね。」

フツウサ「うん、仲が良いんだ。」

　自転車をこいでいるクーたんの後ろで、胸を張って答えるフツウサ。

　さいこうさは、クーたんの自転車をグンと追い抜いたところでバイクを止めて、得意顔で近寄ってきた。

さいこうさ「そんな君たちには、この最高の王冠をあげよう！」

　どこからか出した瓶の蓋を、自慢げに見せるさいこうさ。

クーたん「ふぅ。」

　クーたんも、一旦自転車を止めて、下を向いて一休みしている。

フツウサ「王冠？ジュースの瓶のフタだね。」

さいこうさ「そうさぁ。僕は最高だからね。最高な王冠を集めているのさ。そして、最高な友達に最高な王冠を配らなければならないのさ。」

フツウサ「はぁ･･･そうですか。」

さいこうさ「ほら、クーたんの分も君にあげるよ。二つの王冠受け取って。」

フツウサ「はぁ、どうも。」

　割と強引に瓶の蓋を二つ渡されるフツウサ。

さいこうさ「ふふっ。本当に僕は最高だなぁ。じゃ、またね、二羽とも。最高の日々を！」

　さいこうさは、スタッと優雅にバイクにまたがって、グンとスピードを上げて走り出し、あっという間に見えなくなってしまった。

フツウサ「はぁ、行っちゃった。」

クーたん「行っちゃったね。」

　ちょっと、ポカンとしている二羽。

クーたん「さて、行こうか。」

　ふたたび自転車をこぎだすクーたん。

フツウサ「瓶のフタもらっちゃった。」

クーたん「ぜはぜは。王冠だって言ってたね。」

フツウサ「これ持ってたら王様になれるかなー。」

クーたん「ぜはぜは。なれないだろうねぇ。王冠をかぶっている者が王様なのではなくて、王様のかぶっている物が王冠なだけだからね。」

フツウサ「ふむぅ。」

クーたん「フツウサは王様になりたいと思うかい？」

フツウサ「うーん。わかんない。王様になったら、なんかいいことあるかな？」

クーたん「そうだね、なんでも自分の思い通りにできるようになるかもしれないよ。」

フツウサ「なんでも自分の思い通りか･･･。それって楽しいのかな？」

クーたん「うーん。最初は楽しいかもね。でも、意外とすぐに退屈になってしまうものかもね。」

フツウサ「退屈か･･･。クーたんは王様にはなりたい？」

クーたん「そうだねぇ･･･。物語に出てくるような優しい王様になれるのなら、一度はなってみたいかなぁ。」

フツウサ「うふふ。それじゃ、クーたんの王冠、クーたんのリュックに入れといてあげるね。」

クーたん「ぜは、ぜは、ありがとう。」

　辺りはもう大分暗くなってきてしまっていた。

クーたん「家まで送るよ。ぜはぜは。」

フツウサ「ありがとう、クーたん。」

クーたん「フツウサの家はどっちのほう？」

フツウサ「わかんない！」

　元気に答えるフツウサ。

フツウサ「でも・・・たぶんあっち！」

　自信満々に方向を示すフツウサ。

クーたん「オッケー、さ、帰ろう！」

　クーたんも、何の迷いもなく、その方向を目指す。

フツウサ「優しい王様･･･。」

　クーたんの後ろで揺られながら楽ちんなフツウサ。手の中で鈍く光る王冠をニコニコと眺めていた。

第十二話　クーたんと水鳥を見た日

　またとある日、夕暮れにはちょっと早い時間に川沿いを散歩しているクーたんとフツウサ。

クーたん「鳥さんがいっぱいいるね。」

フツウサ「カモカモ、カモーン！」

クーたん「カモさんは、どこから来て、どこに行くんだろうね。」

フツウサ「みんな、初めて見る顔だね。」

クーたん「フツウサには、カモの顔の違いがわかるのかい？」

フツウサ「なんとなく！」

クーたん「うふふふ。」

フツウサ「うふふふ。」

　太陽の光がキラキラと反射された川を横目に二羽のウサギは幸せそうに歩いていた。

クーたん「お。」

　ふと前を見ると、向こうから二羽のウサギが歩いてきていた。

クーたん「やあ、メロウサさん、こんにちは。」

フツウサ「やあ。」

メロウサ「ごきげんよう、クーたんに、フツウサ。今日も暑い日だったわね。」

　大きな真っ赤なリボンで二つの長い耳を束ねているエレガントなこのウサギはメロウサ。毛の色は白で、目の色が赤い。クーたんも、フツウサも、まだこのウサギとは知り合ったばかりでよくわからないが、“女性らしさ”というものをとても強く意識しているウサギのようだ。

クーたん「あれ、そちらは？」

　メロウサの隣を歩いているウサギは、クーたんも、フツウサも見たことのないウサギだった。

　両耳は長く垂れていて、黄色いリボンがついている。毛の色はゴシックな白と黒で、まるでスーツを着ているかのようにも見える模様。手には自分の身体と同じくらいの大きさのぬいぐるみを持っていて、大きく下僕と書いてある。

メロウサ「うふふ、かわいいでしょ。この子は･･･」

？「のろうさです。」

　メロウサの言葉をさえぎるように名乗るのろうさ。

クーたん「のろうささんっていうんだね。はじめまして、のろうささん。自分はクーたんです。」

フツウサ「こんにちは、のろうささん。フツウサだよ。」

のろうさ「どうも。」

メロウサ「うふふ、この黄色いリボン、私がつけてあげているのよ。かわいいでしょ。」

フツウサ「うん、かわいいね。」

　フツウサはのろうさに近寄り、リボンをまじまじと見つめた。

のろうさ「ちっ、取れないんだよこのリボン。」

　のろうさの表情が曇る。

フツウサ「えっ！？」

メロウサ「今後、私の妹をよろしくね。」

のろうさ「妹じゃないです。」

クーたん「えっ！？」

メロウサ「おほほ、さ、行きましょう。私のカワイイのろうさちゃん。」

のろうさ「僕は僕･･･。」

クーたん「･･･。」

フツウサ「･･･。」

　メロウサはクーたんとフツウサに会釈をして、のろうさを連れて通り過ぎていった。

クーたん「なんかのろうささん不機嫌だったのかな？」

フツウサ「うーん…。ちぐはぐな二人だったねぇ。」

　バサササッ！

　その時、川辺にいた水鳥が一斉に飛び立つ。

フツウサ「わー綺麗だー！」

クーたん「どこかに･･･旅立っていくんだね。」

　クーたんと、フツウサが見上げた先には、少しずつ夏の終わりを感じさせるような、夕暮れの空があった。

第十三話　クーたんに大好きって言えた日

　またとある日。今日もフツウサはクータンと夕暮れ時を歩いている。

　今日のフツウサはちょっと浮かない表情。いつもは、ピンと立っている耳もダラーンと下がってしまっている。気になったクーたんがたずねる。

クーたん「フツウサ元気ない？」

フツウサ「ふむぅ･･･。」

　フツウサはため息をついた。

フツウサ「明日デンシャに乗ってオオミヤコに行かなきゃいけないんだ。」

クーたん「オオミヤコ・・ここからはちょっと遠いところにある大きな町だね。地図では見たことあるけど、行ったことはないな。」

　二羽はテクテクと歩きながらお話をしている。

フツウサ「オオミヤコにお花を描く先生がいてね。たまにフツウサが描いたお花の絵を見せに行くんだ。」

クーたん「ふむふむ。」

フツウサ「なんかね・・その先生、お花の絵の描き方を教えてくれる時にね、雷を落とすんだよね。ピカッピカッドカンッ！って。」

クーたん「あぁ、癇癪を起こす先生なのね･･･」。

フツウサ「なんか怖いんだ。急に雷落ちるから。」

クーたん「なんか怖いんだね・・急に雷落ちるから。」

フツウサ「ちょっと行きたくないなぁ。」

クーたん「ちょっと･･･行きたくないんだね。」

フツウサ「うん･･･。」

クーたん「･･･。」

フツウサ「･･･そうだ、クーたんにフツウサのお花見せてあげるね。」

　ゴソゴソと手提げから１枚の絵を出してクーたんに見せるフツウサ。

クーたん「わー。上手だね。」

フツウサ「うふふ。」

　得意げな顔をしているフツウサ。

フツウサ「クーたん、聞いてくれてありがとう。明日頑張ってくるよ。フツウサ、お花の絵がもっと上手になりたいから。」

クーたん「ふふ。頑張ってね。」

　二羽はその後は楽しくお喋りしながら、いつものところまで一緒に歩いて、お互いの家に帰っていった。

　オオミヤコに行く日の朝は早い。

フツウサ「頑張らなくちゃ！」

　フツウサは必要最低限の荷物だけを持って、外に出た。

　オオミヤコのお花の絵の先生のところに行くにはデンシャに乗っていかなくてはならない。

　デンシャに乗るには、エキに行かなくてはならない。

　エキはフツウサの家からは遠いところにある。

フツウサ「さぁ、出発だ！」

　フツウサは、いつものようにタカタカと走り出した。

　まだお日様は出始めたばかりだけど、もう十分に気温は高く、走るフツウサは汗をいっぱいかいた。

　しばらく走って、やっとエキが見えてきた。

フツウサ「あれ？」

　エキの前に何かがいる。

クーたん「やあ。」

　いつもの挨拶だ。

　そこには、いつもより膨れ上がったリュックを背負い、オシャレなオレンジの帽子をかぶり、そして、手には大きな地図を持ったクーたんが笑っていた。

クーたん「一緒にいくよ。ちゃんとおにぎりも持ってきたよ！」

フツウサ「クーたん！」

　全速力で走るフツウサがクーたんに飛びつく。

フツウサ「クーたん大好き！」

クーたん「わわっ！」

　フツウサが飛びついた勢いのまま、クーたんの大きなリュックの重さも相まって、二羽はゴロゴロ、ゴロゴロと転がってしまった。

クーたん「ふぅっ。やっと起き上がれた。」

　大きなリュックとフツウサにサンドイッチされていたクーたんが、やっと体制を立て直す。

クーたん「しかしあらためて、大好き！って、力いっぱい言えるのって、とっても素敵なことだねぇ、フツウサ。」

　キラキラニコニコしているフツウサもスクッと起き上がる。

フツウサ「うふふ。とっても素敵なことだねぇ、クーたん。」

　早朝のエキには他には誰もおらず、ただ二羽の話す言葉と、セミの鳴き声だけが響いていた。まだまだ今日もとても暑い日になりそうだった。

第十四話　初めてあの小さなウサギを見た日

「クーたん、行かないで。」

第三章　『奪兎』

　ある日も、フツウサはタカタカと走っていた。

　季節は移り、フツウサが思いっきり走ってもそんなに汗をかかないような気候になっていた。

　いつものように目的地を決めずに走っていたフツウサ。今日は、なんだか初めての森の中に入ってきた。

　キョロキョロ周りを見渡しながら、グルグルと走っていく。

フツウサ「大分走ってきたな。」

　フツウサの顔の先、木々のちょっと開けたところに、腰かけるのに丁度よさそうなキノコが生えてるのが見えた。

フツウサ「ちょっと休憩しよう。」

　フツウサが、キノコに座って休憩しようと近づいていくと、ヒュンと何かがフツウサの前を横切る。

？「あたしのだもの。」

フツウサ「あれれ？」

　フツウサが座って休憩しようとしていたキノコに一羽のウサギがいつの間にか座っている。

　大きくクリクリした目、カワイイ花の飾りを頭につけた白い毛の小さなウサギ。初めて会うウサギだ。

　フツウサは、話しかけようかと思ったが、なんだかちょっとこわくなって、そのままタカタカと森の入り口の方に逃げるように走っていってしまった。

　夕暮れ時、クータンと歩いているフツウサ。

フツウサ「クーたんあのね･･･。」

　ちょっと下を向いて話をするフツウサ。

クーたん「どうしたの？」

フツウサ「今日、森で新しいウサギさんを見たんだ。」

クーたん「へぇ、新しいウサギさんね･･･。友達になれるといいね。」

　ニコッと笑うクーたん。

フツウサ「う、うん･･･。うん、そうだね。」

　少し何かを言いかけたフツウサだったが、すぐにニコッと笑って、また明日、あの森へ行ってみようと思うのだった。

第十五話　あまり思い出したくない日

　次の日、昨日の森に走って向かうフツウサ。迷わずに行けるかどうかちょっと心配だったが、自分の勘を信じて走っているうちに、難なくたどり着いた。

　キノコの椅子の近くにくると、自然に忍び足になる。そろーり、そろーりと近づき、パッと覗くと、昨日の小さなウサギはいない。

　フツウサはホッとしたような、残念なような、不思議な気持ちになっていた。

　ちょこんとキノコの椅子に座ってみる。そのキノコの椅子の周りにはちょっとしたスペースがあり、休憩する場所として丁度よかった。

　鳥がさえずる声と、鈴虫の鳴く声が聞こえる。日差しは背の高い木が程よく遮り、小さな風が吹き抜けている。

フツウサ「良い場所だな。今度クーたんにも教えてあげよう。」

　フツウサがのんびりと幸せな気持ちに浸っていると・・・。

？「あたしのだもの。」

　何かの声が聞こえたと思ったその瞬間・・・。

　ドーーーーン！！

　フツウサに今まで味わったことのないような、強烈な衝撃が走る。

　ゴロゴロゴロゴロッ

　信じられないくらいの力で突き飛ばされ、フツウサは森の入り口まで転がってしまった。

フツウサ「なに？･･･なに？･･･なんなの？」

　ゴロゴロ転がってしまったフツウサは泥だらけの傷だらけ。目は回っているし、びっくりしちゃってわけがわからない。

　しばらく呆然としたあと、やっと痛みと悲しみがやってきた。

フツウサ「クーたん･･･痛いよぅ。」

　フツウサは泣きながら起き上がり、クーたんの居そうな方向に走っていった。

　森のキノコの椅子には、フツウサを信じられない力で突き飛ばした、頭に花飾りをつけた小さなウサギが、大きな棒付き飴を舐めながら座っていた。

？「あたしのだもの。」

　小さなウサギは、何度もそうつぶやき、棒付き飴を舐め終わった後も、そのキノコの椅子から離れようとしなかった。

　その日の夕方。

　フツウサは、クータンのリュックに入っていた絆創膏と包帯で手当てをしてもらっていた。

フツウサ「痛いよ、クーたん。」

クーたん「痛いのね。フツウサ。」

フツウサ「悲しいよ、クーたん。」

クーたん「悲しいのね。フツウサ。」

　なかなか涙が止まらないフツウサ。足元には金と、銀の涙コインが一枚づつ落ちていた。

フツウサ「あのキノコの椅子はあの子だけのものなのかなぁ？」

クーたん「あのキノコの椅子はあの子だけのものなのかな･･･。」

　フツウサはクーたんに借りた星印のついたタオルで涙を拭きながらつぶやいた。

　しばらくクーたんのそばで泣くことができて、少し落ち着いたフツウサ。

フツウサ「クーたん、今日は聞いてくれてありがとう。」

　フツウサはそう言ってトボトボとおうちに帰っていった。

　小さく手を振って見送るクーたん。

クーたん「友達に･･･なれるといいね。」

　クーたんは、少し心配そうに笑って、ポツリとつぶやいた。

　家に帰って、すぐにおふとんに潜り込んだフツウサは、不思議なほどぐっすり眠れた。

　とても長い時間眠った後、目が覚めたフツウサは少し元気になっていた。

フツウサ「ちょっと、実験をしてみよう。」

　フツウサは張り切ってなにやら作業を始める。

　家にあった、スポンジと、家の周りに落ちていた木の枝を組み合わせて、器用にキノコの形を作っていくフツウサ。

　手を動かすたびに身体の傷は痛んだが、フツウサは、夢中で作り続け、あっという間にキノコの形を完成させる。

　そして、最後に絵の具でさっと模様を描く。

フツウサ「じゃーん！キノコ椅子の完成！」

　フツウサはパパッとキノコの形の椅子を手作りしてしまった。

フツウサ「これで、どうなるかなぁ･･･。」

　フツウサは明日朝早く出かけるために、今日は早くおふとんにもぐった。

第十六話　執念というものを知った日

　次の日の朝。

　フツウサはお手製のキノコの椅子をもって、あの森に出かけて行った。

　森のキノコ椅子のところにそろりそろりと近づいて、キョロキョロと周りを見回すが、まだあの小さなウサギは来ていないようだ。

フツウサ「よし！」

　さっそくフツウサは森のキノコ椅子のそばに、お手製のキノコ椅子を設置した。

フツウサ「うん、そっくりだ。」

　これなら、あの小さなウサギとおしゃべりできるかもしれない。

　そう思ってフツウサは草の陰に隠れて小さなウサギが来るのを待った。

　フツウサが、草の陰に隠れたまま、虫を観察したり、地面にお絵描きをしたりして待っていると、あの小さなウサギが現れた。

？「ビクッ」

　小さなウサギは、いつものキノコ椅子のとなりに、新しいキノコ椅子があることに気づき、とても驚く。

　ワクワクして見守るフツウサ。

　ピョコン！

フツウサ「あ。」

　しばらく二つのキノコ椅子の前でオロオロしていた小さなウサギは、なんと上半身は森のキノコ椅子につかまり、下半身はフツウサお手製のキノコ椅子に引っ掛けるというようにして、小さな身体を投げ出すように、両方のキノコ椅子を占領した。

　ガサガサッ

　びっくりしたフツウサは、見つからないように草の陰を後にし、そのまま森の入り口へと逃げるように走っていった。

？「あたしのだもの。」

　小さな身体を大きく使い、二つのキノコ椅子を占領したウサギさんが、ポツリとつぶやいた。

　その日のお昼。

　クーたんと一緒に、おりぎりを食べながらお話をしているフツウサ。

クーたん「そっかぁ。キノコ椅子増加作戦はうまくいかなかったんだね。」

フツウサ「むぅ。」

　フツウサは、残念そうな表情をしながら、おにぎりを頬張っている。

クーたん「しかし、その小さなウサギさんから、そのキノコ椅子への執念みたいなものを感じるね。」

フツウサ「執念か･･･。」

　フツウサは残ったおにぎりをパパっと食べ、一気にお茶を飲みほす。

フツウサ「またやってみるよ。」

　クーたんに別れをつげて、タカタカと走っていくフツウサ。

クーたん「うまくいくといいね、フツウサ。」

　クーたんは、少し寂しそうに笑って、フツウサの後姿を見送りながら、ヒラヒラと手を振った。

　家に帰ったフツウサは、二度目のキノコ椅子作成に取り掛かる。

フツウサ「むふふ、椅子が三つになったらどうなるかな。」

　フツウサは、ワクワクしながら、器用にキノコ椅子を作り上げた。

　そしてその日の夜はドキドキソワソワしてしまって、おふとんに入っても、なかなか眠れなかった。

　クーたんにもらった塗り薬が良かったのか、小さなウサギの強烈な体当たりで傷ついた身体は、すでに大分良くなっているようだった。

第十七話　クーたんとヒソヒソ話をした日

　次の日の朝早く、フツウサはお手製のキノコ椅子を手に持ち、タカタカと森に向かって走っていった。

　さすがにこんなに朝早くに、あの小さなウサギは来ていないだろうとフツウサは思っていたが、森のキノコ椅子の近くにくると、やっぱりそろり、そろりとなってしまう。

　森のキノコ椅子スペースは、昨日と同じで、二つのキノコ椅子が並んだままだった。

フツウサ「良かった。壊されたりしてない。」

　フツウサは、チャチャッと三つ目のキノコ椅子を設置した。

フツウサ「むふふ。」

　草の陰に隠れて、あの小さなウサギを待つフツウサは、ワクワクを抑えきれないという感じだった。

　しかし、しばらく待っていると、昨日遅くまで眠れなかったこともあって、少し眠くなってきてしまった。

　しばらくは、地面にお絵描きしながら我慢していたが、どうしても眠くなって、ウトウトしてしまった。

　丁度そこにやってくる小さなウサギ。

？「ビクッ」

　昨日は二つだった、キノコの椅子が三つになっていることに、とても驚く。

？「あ･･･あたしのだもの。」

　一応やってみたが、やっぱり小さな体では、どんなに大きく使っても、三つのキノコ椅子を占領することはできない。

　しばらく、あたふたしていた小さなウサギは、やがてピーンと何かをひらめく。

？「あたしのだもの。」

　そういうと、小さなウサギは、砂煙を巻き上げながら、信じられないスピードでどこかへと走って行ってしまった。

　小さなウサギが走り去るときに生まれた凄まじい風圧で、フツウサは目を覚ます。

フツウサ「あ、寝ちゃってた。良かった。まだあの小さなウサギさんは来てない。」

　フツウサは目をゴシゴシこすり、涎をグイッと拭って、小さなウサギを待った。

　程なくして小さなウサギがまた砂埃を巻き上げながら信じられないスピードでやってきて、キノコ椅子の前でピタッ

と止まる。

　そのビューンという風圧は、草陰に隠れているフツウサのところにまで届くほどだった。

フツウサ「なんか･･･すごいウサギさんだな･･･。」

　フツウサは、小さなウサギの動きに目を白黒させていた。

フツウサ「あ。」

　フツウサが隠れて見ていると、なんと小さなウサギは、スッとキノコの椅子の一つに小さな小さなウサギのぬいぐるみを置いた。

　そして、残り二つのキノコ椅子を小さな身体を大きく投げ出して占領する。

？「あたしのだもの。」

　ガサッ

　思わず隠れていた草陰から顔を出してしまうフツウサ。

フツウサ「もーう！」

　フツウサはしてやられたと思い、森の入り口に向かって走り出す。

？「あたしのだもの。」

　繰り返し、そう小さくつぶやく小さなウサギ。

　一生懸命三つのキノコ椅子を占領し続けているその表情はどこか寂し気だった。

　その日のお昼。また一緒におにぎりを食べている二羽。

クーたん「そっかぁ。ぬいぐるみとはね。」

フツウサ「そうきたかぁって感じだよ。」

クーたん「さて、次はどうしようね。またキノコ椅子を増やすかい？」

フツウサ「うーん。あの子、何個ぬいぐるみ持ってるんだろう。」

クーたん「ふふっ、そうだね。ところでフツウサはあの子とどうしたいんだっけ？」

フツウサ「わかんない！」

クーたん「わかんないのね。」

フツウサ「でも･･･。」

クーたん「･･･でも。」

フツウサ「悲しくならないようにしたい。」

クーたん「悲しくならないようにしたいんだね。」

フツウサ「うん！」

クーたん「それじゃ、いいこと教えてあげる。ちょっと耳貸して。」

　他には誰もいない山の頂上でヒソヒソ話をする二羽のウサギ。

　そして、明日の朝、この山で待ち合わせて、あの森に一緒に向かう約束をした後、フツウサとクーたんは別れた。

第十八話　あの子の名前が決まった日

　次の日、朝の森。

　キノコ椅子のあるスペースの草陰で隠れているクーたんとフツウサ。

　しばらくすると、小さな小さなぬいぐるみを持った小さなウサギがやってきた。

？「あたしのだもの。」

　ぬいぐるみを一つのキノコ椅子におき、ぴょいっと残り二つのキノコ椅子を占領する小さなウサギ。

　フツウサがクーたんを見ると、クーたんは優しく頷いている。

フツウサ「よし！」

　ガサッ

　一気に草陰から飛び出すフツウサ。スタスタと三つのキノコ椅子を占領している小さなウサギに近づいていく。

？「ビクッ！」

　さすがにちょっと慌てる小さなウサギ。

？「あ、あ、あたしのだもの！」

フツウサ「あたしのだもの、なんだね。」

？「･･･？」

　ガサッ

　クーたんも草陰から出てくる。

？「あ、あ、あたしのだもの･･･。」

クーたん「あたしのだもの、だね。」

？「･･･。」

　小さなウサギは、目をパチクリしている。

フツウサ「あなたお名前は？」

？「名前･･･ない。･･･あたしは･･･ただ･･･奪うもの･･･。」

クーたん「ただ奪うもの。うばう･･･ウサギさんか･･･。」

フツウサ「じゃぁ、ウバウサだね。」

？「うば･･･うさ･･･？」

フツウサ「そう、あなたの名前は今日からウバウサちゃんね。」

クーたん「クーたんと言います。よろしくね。」

フツウサ「フツウサだよ。よろしくね。」

ウバウサ「･･･クー。･･･フー。」

クーたん「お近づきのしるしに。」

　クーたんはリュックからゆっくりとおにぎりを取り出して、ウバウサの近くにそっと置いた。

クーたん「それじゃ、またね。ウバウサ。」

フツウサ「またね。ウバウサちゃん。」

　頑なにキノコ椅子を占領したままのウバウサに別れを告げ、クーたんとフツウサは森を後にした。

　また静かになった森。ウバウサはそっと置いてあるおにぎりに目をやる。

　ピョコンとキノコ椅子からおり、おにぎりを手に取り、パクリと一口食べてみる。

　おにぎりは優しい味だった。中の具はタラコで、程よい塩気と、独特の粒々感が楽しかった。

ウバウサ「またね･･･だもの。」

　ポツリとつぶやくウバウサ。

　チャリーン。

　足元にはオレンジ色のコインが一枚落ちた。

　キノコ椅子の森からの帰り道。のんびりおしゃべりしながら歩いているクーたんとフツウサ。

　ヒュン　グサ！

　どこからか信じられないスピードで何かが飛んできて地面に刺さった。

クーたん「どわ！」

　思わず飛びのくクーたん。

フツウサ「なんだろ？」

　フツウサが見てみると、

「あたしのだけど、かしてあげる。」

　可愛い字でそう書かれた葉っぱがくくりつけられていた、大きな棒付き飴だった。

第十九話　～とある小さなウサギの回想～

　ちょっと昔のお話

「おとなしくしてるんだよ。」

　そう、あたしに言って、いつもニーは一羽で出かけて行く。

　残ったあたしは、いつも小さなぬいぐるみを抱えてひとりぼっち。

　寝るのも、ご飯を食べるのも、お散歩も、雨を眺めるのもひとりぼっち。

　ニーは一度出かけると、いつおうちに帰ってくるかわからない。

　そして帰ってくるときは、いつも夜遅く、そして傷だらけ。

　ニーとのおしゃべりは、おうちの中ではなく、いつもニーのお気に入りの森の小さなキノコ椅子に、二羽で一緒に座ってする。ボンヤリとした月明かりの下で。

「いやぁ、今回も大変だったよ。」

「星の住民の抵抗が強くてさ。」

「まぁ、でも、ドカーンとやって、パァーッとやってきたよ。」

　傷だらけで嬉々としてお話をするニー。

　でもいつもどこか哀愁がただよっている。

「ニーの仕事はなんだもの？」

「仕事･･･？ヒーローだよ。」

「ヒーローってなんだもの？」

「そりゃぁ、悪いやつたちをやっつけるやつのことさ。」

「ニーがやっつけているのは悪いやつなのか？」

「そりゃぁそうさ、ヒーローの敵は悪いやつに決まっているだろ。」

　あたしはニーの本当の仕事を知っている。

　ニーの本当の仕事はケイエイがうまくいかなくなって、フリョウサイケンってやつで大変になってしまって、破棄し

なくちゃならなくなった星を破壊する仕事。

“星破壊屋”だ。

　あたしと、ニーは、宇宙でも珍しい強ウサギ種。

　生まれた時から、信じられないほどの身体の力を持っている。

　星を破壊する仕事はそういった珍しい力を持った生き物にしかできない。

　ニーはその身体の力と仕事を誇りに思っている。

　この広い宇宙では、星破壊屋の仕事は必要なことなんだと思う。

　そしてあたしもいずれは星破壊屋の仕事をするようになるのかもしれない。

　それはあたし達のような者にしかできない仕事だし、何よりあたしはまだこの身体の有り余る力の使い道を見つけられていないんだもの。

「さて、今月はあと二件悪いやつらをやっつけなくちゃならないんだ」

「ニー、もう行くの？」

「ああ。大人しくしているんだよ、おチビちゃん。それじゃね！」

　シュババーン！！

　その傷だらけのウサギは、カバンから出したライオンのお面をかぶり、森から、信じられない脚力だけで、宇宙に飛び出していった。

「大きすぎる力は、守ることよりも、奪うことに適している。オチビよ、貴様には奪う覚悟ができているか？」

　ふと、死んだジーの言葉を思い出す。

「ジー。あたしたちはきっと、ヒーローなんかじゃないんだもの。あたしたちは･･･、あたしたちはたぶん･･･ただ奪うもの、だもの。」

　傷だらけの兄が飛び立った後、キノコ椅子にちょこんと座っている、頭にお花の飾りをつけた小さなウサギさんは、一羽で悲しそうにつぶやいたのだった。

第二十話　初めてはなびをした日１

　秋も深まるある日。クーたんとフツウサは夕暮れの道を歩いていた。

クーたん「だいぶ涼しいね。」

フツウサ「うん。だいぶ涼しいね。」

　穏やかに会話しながら歩いていると、向こうの空から何かがフラフラと近づいてくる。

クーたん「あ、うちゅうさだ」

フツウサ「うちゅうさ、こんにちは！」

うちゅうさ「･･･。」

　両目がお星さまのウサギ。毛の色は白。いつも空をフラフラと飛んでいて、どこからともなく現れる。挨拶しても返事はしてくれないし、誰もまともな会話をしたことがない。だけど、なんだか憎めない。

クーたん「もう秋も終わりだね。うちゅうさ。」

フツウサ「なんだかちょっと寂しい気持ちになるね、うちゅうさ。」

うちゅうさ「･･･。」

　二羽の呼びかけには答えず、フラフラ宙を浮いているうちゅうさ。

クーたん「あ、もう行くのかな？」

フツウサ「あれ？」

　フラフラと飛び去るうちゅうさが、ヒラリと一枚の紙を落としていく。

クーたん「なんだろう？」

　首を傾げるクーたんと、タカタカと走ってその紙を手に取るフツウサ。

フツウサ「えーと、はなび、秋の大売り出し、だがしうまし。」

クーたん「ああ、だがしうましのチラシか」

フツウサ「クーたん、はなびってなに？」

クーたん「うん。はなびっていうのはね、火でできたお花のことみたいだよ。自分は、本でしか見たことないけど。」

フツウサ「えええええっ。火でできたお花！」

　フツウサの目がキラキラと輝く。

フツウサ「行こう、だがしうましに、今すぐ行こう！」

クーたん「うん、行ってみよう！」

　クーたんと、フツウサは駄菓子屋“だがしうまし”に向かってタカタカと走り出した。

　駄菓子屋“だがしうまし”古くて小さい店だが、相変わらず趣のあるたたずまい。

フツウサ「こんにちは！」

　お店のドアをガラッと開けて、元気よくフツウサが挨拶する。

店主「やぁ、フツウサ。こんにちは。」

　店の奥から店主の声。店主はウサギ達に姿を見せることはない。

クーたん「ぜは、ぜは、こんにちは。」

　少し遅れてクーたんも到着。

店主「やぁ、クーたんだね。こんにちは。」

フツウサ「チラシ見て、はなび買いにきたよ～」

クーたん「うちゅうさがチラシを落としていきまして･･･。」

店主「ほほぉ。お目が高いね、おふたりさん。」

フツウサ「むふふ。」

店主「とある星の売れ残りを安く仕入れてきたんだ。みんなで是非楽しんでもらいたいと思ってね。」

クーたん「これかな？」

　お店の棚に、ワクワクはなびセットと書かれた大きな包みが置いてある。

フツウサ「おお、なんかいっぱい入ってる！」

クーたん「すいません、これください、いくらですか？」

店主「大サービスだ。無料でいいよ。そのかわり、そのはなびでみんな笑顔になって、オレンジコインをいっぱい落として、駄菓子を買ってね。」

フツウサ「おお、やった、無料だ！」

クーたん「店主さん、ありがとう！それじゃ！」

店主「はい、いってらっしゃい」

　クーたんとフツウサはワクワクはなびセットを仲良く持って、駄菓子屋を後にした。

クーたん「さて、どうしようか。」

フツウサ「みんなを呼ぼう！」

クーたん「そうだね。それじゃ、手分けするのがいいかもね。」

フツウサ「うんうん。そうしよう！」

クーたん「とりあえず、このワクワクはなびセットは広場においておこうか。」

フツウサ「よし、まずは、広場に行こう！」

　広場に向かう二羽。広場では、丁度のろうさが日向ぼっこしていた。

クーたん「やぁ、のろうささん！」

フツウサ「やぁ！」

のろうさ「あ･･･どうも。」

クーたん「今日みんなではなび大会をやろうと思うんだ。」

フツウサ「のろうささんも来てね。」

のろうさ「はなび･･･。」

フツウサ「うん！火でできたお花なんだって。のろうささんも是非参加してね。」

クーたん「よし、じゃあフツウサ、手分けしてみんなに伝えに行こうか！」

フツウサ「うん。行こう！」

のろうさ「あの･･･。」

クーたん「うん･･･？」

のろうさ「はなびセット置きっぱなしで大丈夫ですかね？」

フツウサ「そっか！」

フツウサは、ワクワクはなびセットに、持っていたペンで書置きをする。

ひろばで
はなびをします。
みんなきてね。

　クーたんとフツウサはタカタカと皆に伝えに出かけた。

のろうさ「いや、そうじゃなくて･･･。ここにはなびセットを置きっぱなしにしておいて、誰かに持っていかれちゃう心配とかしないのかな･･･。」

　ふぅ、とため息をついたのろうさは、ペタンと座り、ワクワクはなびセットのそばで皆を待つことにした。

第二十一話　初めてはなびをした日２

　フツウサはタカタカと走ってクローバーの丘に到着した。

フツウサ「たのもー。」

かいぞうさ「おや、フツウサ、こんにちは。」

メロウサ「あら、フツウサちゃんこんにちは。」

フツウサ「お、メロウサさんもいた。」

　フツウサは二羽に今日、はなび大会をやることを伝えた。

かいぞうさ「わかった。仕事が終わったら向かうよ。」

メロウサ「のろうさちゃんにも教えてあげなきゃ。」

フツウサ「のろうささんには、もう伝えたよ。」

メロウサ「そう。じゃ、私もオシャレが終わったら広場へ向かうわね。」

フツウサ「うん、じゃ、よろしくね～。」

　一方クーたんはおにぎり山に向かっていた。

クーたん「誰かいるかな。」

　おにぎり山では、ロップとなきうさが二羽でのんびりしていた。

クーたん「やあ！」

ロップ「あ･･･どうも。」

なきうさ「クーたん、こんにちは。」

クーたん「今日、広場ではなび大会をやるんだ是非きてね。」

ロップ「はなび！（（はなび･･･。本で見たことある。火、熱い、こわい、まぶしい、こわい、みんながくる、集団こわい･･･でも行けばきっとみんなと仲良くなれる･･･））ブツブツ。」

なきうさ「クーたん、はなびって何？」

クーたん「きれいな、火でできたお花のことだよ。」

なきうさ「すごい、火でできたお花･･･。見てみたい。ポロポロ。」

　涙を流すなきうさ。

クーたん「それじゃ、広場でまたね。」

　クーたんは手を振って、ロップとなきうさと別れた。

　フツウサは月饅頭屋のワゴン車の前に走ってきた。

フツウサ「こんにちは、月饅頭屋さん。」

月ウサギ一「へい、らっしゃい」

フツウサ「今日、広場ではなび大会をやるんだ。饅頭屋さん達も二羽できなよ。」

月ウサギ一「はなびかぁ･･･。いいっすねぇ。でも今日も販売ノルマがきつくて･･･。」

　もう一羽の饅頭屋さんが涙目で頷いている。

フツウサ「うーん。広場で饅頭売ればいいんじゃないかな？」

月ウサギ一「おぉ、その手があったか。お客さん賢いね。」

フツウサ「うふふふ。賢いんだ、フツウサ。うふふふ。」

月ウサギ一「それじゃ、頃合い見てワゴン車で広場に行きますんで。」

フツウサ「うん、じゃ、よろしくね。」

　フツウサは二羽の月ウサギに手を振ったあと、タカタカと走っていった。

　その頃クーたんはキノコ椅子の森に向かっていた。

　森に向かう途中で、丁度散歩していた、さいこうさにであう。

さいこうさ「いや～、クーたん。今日も最高な日だね。」

クーたん「こんにちは。さいこうさ。今日、広場でみんなではなび大会をやろうと思うんだ。良かったら来てね。」

さいこうさ「はなびかい？それは最高だね。それじゃ、みんなに配るために最高の王冠をたくさん用意しなくちゃ。」

クーたん「それじゃ、広場でね。」

さいこうさ「最高の夜にしようじゃないか。いやーそれにしても僕は最高･･･。」

　さいこうさは、まだ何か喋っていたが、急いでいたクーたんは、また、タカタカと走り出した。

クーたん「ふーっ。」

　やっと、森のキノコ椅子にたどり着き、一息ついているクーたん。

　リュックから取り出したタオルで汗を拭いて、水筒の水をグイッと飲む。

　そのとき、砂煙を巻き上げて信じられない勢いで一羽のウサギが走ってくる。

ウバウサ「あたしのだもの。」

　体当たりはせず、クーたんの前にピタッと止まってウバウサは言った。

クーたん「やあ、ウバウサ。こんにちは。」

ウバウサ「こんにちは。クー。」

クーたん「今日の夜、広場でみんなではなび大会をやるんだ。良かったら来てね。」

ウバウサ「みんな･･･ハナビ･･･。わかった。行くもの。」

クーたん「それじゃ、広場でね。」

　クーたんは、ウバウサに手を振って、森を後にしていった。

ウバウサ「ハナビ･･･。」

　砂煙を巻き上げて、信じられない勢いで走っている一羽のウサギ。

　あっという間に駄菓子屋“だがしうまし”の前まで来て、ピタッと止まる。

ウバウサ「おーい、駄菓子屋！」

　店のドアをバーンと開けて、ウバウサは店主を呼ぶ。

店主「やあ、お花をつけた小さなウサギさん、おっと今はウバウサちゃんという素敵な名前があるんだったね。久しぶりだね、元気かい？」

　いつものように姿は見せず、声だけで店主は応じる。

ウバウサ「ウーは元気だもの。駄菓子屋、またドアがとれちゃったもの。」

店主「あらら。また直しておくからそこに置いておいてね。今日はまた棒付き飴かい？」

ウバウサ「今日はオレンジ持ってきてないもの。」

店主「そうかい。またお兄ちゃんと楽しくおしゃべりして、オレンジコインが落ちるといいね。」

ウバウサ「ウーは最近、クーやフーとおしゃべりするから、二ーがこなくても、オレンジいっぱい落ちるもの。」

店主「ふふ。そうなんだね。それはよかったね。」

ウバウサ「ウーは、さっきだってクーにハナビに誘われたんだもの。」

店主「そう･･･。よかったねぇ。本当に。」

ウバウサ「だけど、ウーは、ハナビ知らないのに、クーに行くって言っちゃったんだもの。駄菓子屋、ハナビってなに？」

店主「はなびはね、僅かな時間だけ咲く、火でできたお花だよ。とっても綺麗なんだ。」

ウバウサ「火の花か。ウーは綺麗なお花、見たいもの。」

店主「うんうん。よかったね。綺麗なお花、見られるよ。みんなと楽しんでくるといいよ。」

ウバウサ「でもウーは奪うものだから、みんなに迷惑かけないかちょっと心配だもの。」

店主「ふむ。あ、そうだちょっと待って、とっておきのはなびがあるんだ。みんなにはちょっと危ないけど、あなたなら大丈夫だと思う。あなたの得意な身体の力でみんなの注目と時間を奪ってあげるといいよ。」

ウバウサ「？」

第二十二話　初めてはなびをした日３

　いつの間にか辺りは暗くなり、いろんなウサギが広場に集まっていた。

月ウサギ一、二「いらっしゃーせー。饅頭いかがっすかー。」

さいこうさ「さぁ、最高のみんなに最高の王冠をあげよう。」

メロウサ「私のかわいい、のろウサちゃん、写真撮ってあげるわ。」

　パシャ、パシャ！

のろうさ「･･･うっとうしい。」

　聞こえるような声でボソッとつぶやくのろうさ。

ロップ（（ウ、ウサギがいっぱい、こわい、でもみんな嬉しそう･･･。私も不安だけど、こわいけど、でもここにいたい･･･。））

なきうさ「なんだかワクワクしますね。ポロポロ。」

かいぞうさ「花火かぁ。改造されてからは初めてだなぁ。改造される前はどうだったかなぁ。ああ、覚えてないやぁ。」

フツウサ「ウバウサちゃん遅いなー、まだかなー。」

　そのとき、遠くの方から砂煙が信じられない勢いで近づいてくる。

ウバウサ「来たもの。」

　フツウサの前にピタッと止まってウバウサは言った。

クーたん「さて、始めようか。」

　クーたんはワクワクはなびセットを開けて、みんなに手持ちはなびを配っていく。

　みんなそれぞれ、はなびを受け取る。

フツウサ「クーたん、どうしたら、この棒がお花になるの？」

クーたん「うん。この棒の先に火をつけるみたいなんだ。そうするとお花になるらしいよ。」

フツウサ「火･･･ない。」

かいぞうさ「私の左手に取り付けられている害虫バスターからは、火も出せるよ。キャンプの時なんかも便利なんだ。」

クーたん「良かった。それじゃ、お願いします。」

　かいぞうさは、みんなのはなびに害虫バスターで火をつけて回った。

　シュワワワワー

　みんなの手元で、火のお花が咲く。

なきうさ「わぁ、きれい･･･。ポロポロ。」

フツウサ「クーたん、すごい、すごい、本当にお花になったよ！！」

クーたん「お花になったねぇ。きれいだねぇ。」

ロップ「きれい･･･。」

のろうさ「線香はなび･･･。僕の気分にぴったりだ。」

メロウサ「きゃぁ！線香はなびとのろうさちゃん、素敵すぎるわ！」

　パシャッパシャッ

さいこうさ「うんうん僕もはなびも最高だなぁ。」

ウバウサ「ぴかぴかのお花、きれいだもの。」

月ウサギ一、二「饅頭いかがっすかー。」

　ウサギ達は火の花と煙に包まれ、素敵な時間を過ごした。

かいぞうさ「ふぅ。さて、これで全部のはなびに火はつけ終わっちゃったかな。」

ウバウサ「まだあるもの。」

かいぞうさ「うん？」

　ウバウサは何やらサッカーボールくらいの玉を持っている。

かいぞうさ「これもはなびかい？」

ウバウサ「ドッカンだもの。」

かいぞうさ「うん。わかった。この紐に火をつければいいんだね。」

　～時間はちょっと遡る～

ウバウサ「駄菓子屋。この玉は何？」

店主「それは打ち上げはなびといって、空に大きな火の花を咲かすことができる道具だよ。」

ウバウサ「空に･･･。」

店主「そう。その紐に火をつけたら、空に向かって投げてみて。大きくて、とても綺麗な火の花が咲くから。」

ウバウサ「わかった。ウー投げるもの。」

店主「ウバウサちゃん、力入れすぎて宇宙の果てまで投げちゃだめだよ。加減して投げてね。」

ウバウサ「ウーはコントロールが良いから大丈夫だもの。」

・・

かいぞうさ「よし、紐に火がついたよ。」

ウバウサ「うーん。ほいっ！」

　ウバウサは手をグルグルグルグルと回した後、打ち上げはなびを空に向かって放り投げる。

　ヒューーーーーッ

　ドッカーーーーーン！！

　晩秋の夜空に見事な打ち上げ花火が上がった。

かいぞうさ「うわぁ、見事だね。」

のろうさ「これは･･･すごい。」

メロウサ「あらあら、まぁまぁ。」

月ウサギ一「すげー。女王様にも見てもらいたかったなぁ。」

月ウサギ二「たーまやー、です。」

フツウサ「すごいー。空に大きなお花が咲いたー！」

クーたん「すごいねー。咲いたねー。」

ロップ「･･･きれい。」

なきうさ「きれいだよー。えーんえーん。」

さいこうさ「最高だー。最高だー。」

ウバウサ「むふ。ちゃんと手加減できたもの。」

　ウサギ達は、打ち上げ花火の残響に素敵な余韻を感じながら、それぞれ幸せな気分に時間を奪われていった。

　ウサギ達のいる広場から少し離れたところにある駄菓子屋、“だがしうまし”。

　珍しく店主が店の外に出て、壊れたドアを直している。

店主「きれいに上がったね、ウバウサちゃん。」

　店主は満足そうにうなずいていた。

店主「さぁ、もうすぐ寒い冬がやってくるぞ･･･。」

　店主が腰をさすりながら店の中に戻ろうとすると、フラフラと、うちゅうさが空から降りてくる。

店主「おや、うちゅうさ･･･。」

うちゅうさ「･･･。」

店主「そうか･･･。クーたんの修業がもうすぐ終わるんだね。」

うちゅうさ「･･･。」

　うちゅうさは何も語らず、またフラフラと空へと消えていった。

店主「寂しくなるね。」

　店主はポツリと呟いて店の中へと戻っていった。

　晩秋の夜の空は、やがて来る別れの季節を静かに迎え入れる準備をしていた。

第二十三話　とても長い一日１

「さようなら･･･クーたん、さようなら。」

星のクーたん最終章　『星兎』

　古くて小さいが、趣のある駄菓子屋、“だがしうまし”の店の中。

店主「はい、ココア二箱ね。笑顔コイン二枚になります。そこの箱にコイン入れておいてね。」

フツウサ「･･･。」

店主「･･･？どうかしたかい、フツウサ。」

　相変わらず、姿を見せずに客とやりとりする駄菓子屋の店主。

フツウサ「･･･。」

店主「元気がない･･･ね？」

フツウサ「･･･クーたんが。」

店主「うん。」

フツウサ「なにか思い詰めているような感じなんだ･･･。」

店主「そう･･･。クーたんがね。」

フツウサ「フツウサは･･･どうしていいかわかんない。」

店主「フツウサは、どうしていいか･･･わかんないんだね。」

フツウサ「･･･。」

店主「聞いてみたらいいんじゃないかな。何かあったかい？って。」

フツウサ「なんか･･･。」

店主「なんか･･･？」

フツウサ「ちょっと聞くのがこわいんだ。今までは何でも話してくれていたから。」

店主「そう。ちょっと聞くのがこわいんだね。」

フツウサ「うん･･･。」

店主「･･･うん。」

フツウサ「ありがとう。駄菓子屋さん。明日、勇気を出して、クーたんに聞いてみるよ。」

店主「･･･うん。勇気、出せるといいね。」

　やっとニコッとしたフツウサは、ココアの箱を二つ抱えて元気に走り去っていった。

店主「･･･いよいよなんだね、クーたん。」

　店の奥で店主は深いため息をついた。

　お昼、おにぎり山。

　天気は良いが、もう風はとても冷たく、フツウサがどんなに走っても汗をかけないような陽気になっていた。

　山の頂上で座っておにぎりを食べている二羽。

クーたん「ふーっ。」

　ため息をつくクーたん。

フツウサ「ふーっ。」

　つられてフツウサもため息をついた。

フツウサ「クーたん･･･。何かあったの？」

　勇気を出して、フツウサはクーたんに聞いてみた。

クーたん「うん･･･。」

フツウサ「フツウサに･･･言いづらいことなのかな？」

クーたん「うん･･･実はまだ、誰にも言っていないことなんだ。」

フツウサ「誰にも･･･。」

クーたん「うん。」

フツウサ「･･･。」

クーたん「･･･はふぅ。」

　また大きなため息をつくクーたん。

フツウサ「･･･はふぅ。」

　またつられてため息をつくフツウサ。

クーたん「実はね･･･。」

フツウサ「ゴクリ。」

クーたん「お別れしなくちゃならないんだ。」

フツウサ「！？」

　びっくりして、立ち上がり、座ったまま下を向いているクーたんを見下ろすフツウサ。

クーたん「ごめんね、フツウサ。実は、自分はね･･･。」

　フツウサの両耳がパタッと倒れて、クーたんの声が聞こえないように塞がる。

フツウサ「なんで！なんで！知らない！わかんない！クーたんなんて、クーたんなんて、大っ嫌いっ！」

　フツウサはまだ食べかけのおにぎりをその場においたままで、泣き叫びながら、その場を走り去ってしまった。

クーたん「ああ、フツウサ、待って、待って、フツウサー！」

　クーたんは、フツウサを追いかけようとするが、慌ててしまい、うまく立ち上がれず転んでしまった。

　そしてあっという間に見えなくなるフツウサ。

　追いかけることすらできなかったクーたんは、フツウサが置いていった食べかけのおにぎりを静かに片づけ、一度自分の家へと帰るのだった。

第二十四話　とても長い一日２

　家に帰ったクーたんは、出かけるときにはいつも持ち歩いている、たくさんの荷物を置いて身軽になり、自転車にまたがって、フツウサを探しに出かける。

クーたん「いろんな場所を探してみよう。」

　まずはクローバーの丘へと出かけるクーたん。自転車はスピードをあげ、あっという間に目的地に到着。自転車をとめ、クーたんがせわしなくフツウサを探していると、すぐにかいぞうさが話しかけてくる。

かいぞうさ「いやぁ、クーたん。元気かい？」

クーたん「こんにちは。かいぞうさ。フツウサを見なかったかい？」

かいぞうさ「うん？今日は見てないよ。どうかしたのかい。クーたん、顔色が良くないように見えるけど。」

　クーたんは、かいぞうさに自分が近々お別れしなくちゃいけないこと、それを聞いたフツウサが泣きながらどこかに行ってしまったことを伝えた。

かいぞうさ「お別れ･･･。それは、特にフツウサにはつらいことだろうね。」

クーたん「･･･。」

　胸が苦しくなるクーたん。

かいぞうさ「今は急いで探すんだろう？落ち着いたら私にも詳しいことを教えてね。私もフツウサを見つけたらなんとか連絡するから。」

クーたん「ありがとう、それじゃ。」

　クーたんは、一度も笑うことなくクローバーの丘から自転車で走り去った。

かいぞうさ「お別れか･･･。急すぎるよ、クーたん。」

　かいぞうさは、寂しそうにつぶやいて、クローバーの丘の奥へと消えていった。

　必死のクーたんはとにかく自転車をこぐ。クーたんが次に向かった先はエキだった。エキに着いたクーたんは自転車をおり、エキ周辺にフツウサがいないか隈なく探す。

クーたん「フツウサー。フツウサやーい。」

　しかし、フツウサはいない。しばらく探しているとエキにデンシャが到着し、そのデンシャから、なきうさがおりてくる。

なきうさ「こんにちは、クーたん。」

クーたん「･･･なきうさ。」

なきうさ「どうかしたの？クーたん。顔色が良くないけど。」

クーたん「実は･･･。」

　クーたんは、なきうさに自分がお別れしなくてはならないこと、それを聞いたフツウサが泣きながらどこかに行ってしまったことを伝えた。

なきうさ「お別れ･･･。ポロポロ。」

　涙を流すなきうさ。

クーたん「なきうさは、フツウサを見なかったかい？」

なきうさ「私は今朝からデンシャで隣町に出かけていたから、わからないよ。今帰ってきたところだもん…。」

クーたん「ああ、そうか。そうだよね。」

なきうさ「クーたん、大分慌てているね。フツウサの家には行ってみたの？」

クーたん「そうか、自分は一度フツウサの家の前まで行ったことがあるんだった！」

　クーたんは、転びそうになりながら自転車のとめてあるところまで戻り、自転車にまたがってまた、なきうさの前に戻ってきた。

クーたん「ありがとう、なきうさ、それじゃまた。」

なきうさ「うん。あとで私にも詳しく聞かせてね。」

　クーたんは、そのなきうさの言葉に返事をする余裕もなく、一度しか行ったことのない、フツウサの家に自転車で向かうのであった。

なきうさ「悲しい･･･悲しいね、クーたん。」

　なきうさは、その場でいつまでも大粒の涙をポロポロとこぼしていた。

第二十五話　とても長い一日３

　道に迷うのではないかとすぐに心配になってしまうクーたんは、普段、一羽で散歩をするときは、あまり新しい道を探索しない。だから自分だけで通ったことのある道はとても少ない。

　また、一度走った道を感覚で覚えてしまうフツウサとは違って、一つの道を覚えるのには、何度もそこを通る必要のあるタイプである。

　だから、目印の沢山あるエキとは違い、一度行ったきりのフツウサの家を探すのがあまりうまくいかなかった。

　自転車でグルグルフツウサの家を探し回っていると、バイクに乗ったさいこうさに出くわす。

さいこうさ「いやークーたん。今日も最高の日･･･、ではなさそうだね？」

　バイクを止めて、クーたんに話しかけるさいこうさ。

クーたん「ぜは、ぜは、さいこうさ･･･。フツウサの家を知っているかい？」

さいこうさ「おお。藪から棒だね、クーたん。どうかしたのかい？」

　クーたんは、さいこうさに自分がお別れしなくてはならないこと、それを聞いたフツウサが泣きながらどこかに行ってしまったことを伝えた。

さいこうさ「お別れ･･･。本当なのかい？クーたん･･･。」

クーたん「ごめん、さいこうさ、それで急いでいるんだ。フツウサの家の場所を知っているかい？」

さいこうさ「うーん。ごめんよ、クーたん。僕は最高だけどね。フツウサの家の場所は知らないんだ。この間、ウバウサがフツウサの家に遊びに行った話を嬉しそうにしていたから、ウバウサならフツウサの家の場所を知っているかもしれないよ。」

クーたん「本当かい！？ありがとう、さいこうさ。キノコ椅子の森なら、ちゃんと道は覚えている。ウバウサにあってくるね！それじゃ！」

　クーたんは、さいこうさにお礼を言った後、また一生懸命自転車をこいでキノコ椅子の森に向かっていった。

さいこうさ「別れには王冠が･･･王冠が必要だ。あげなきゃ、クーたんに…今まで以上に最高の王冠を･･･。」

　珍しく冴えない表情でブツブツ言いながら、さいこうさは再びバイクにまたがり、去っていった。

クーたん「ぜは、ぜは･･･。ぜは、ぜは･･･。」

　夢中で自転車をこいでいるクーたん。いつもはすぐにバテてしまうクーたんだが、今日は疲れを感じる余裕すらない

ようだった。

　キノコ椅子の森に到着。世話しなく自転車をとめ、キノコ椅子に座って落ち着きなくウバウサを待つ。

　程なくして、遠くからすごい砂煙と共に、信じられないスピードで小さなウサギが走ってくる。

　ダダダダダダダダッ

　ピタっ！

ウバウサ「あたしのだもの。」

　クーたんの前でピタッと止まるウバウサ。

ウバウサ「クー、どうした。元気ないもの。」

　クーたんの表情を見てちょっと心配になるウバウサ。

クーたん「ウバウサ、フツウサの家の場所を知っているかい？」

ウバウサ「知ってる。この前遊びに行ったんだもの。ドア壊しちゃったけど。」

クーたん「教えてくれウバウサ！フツウサの家にどうしても行きたいんだ。」

ウバウサ「いいぞ。クー。」

クーたん「ありがとう！」

　タタタッと自転車にまたがり、ウバウサの前に来るクーたん。

クーたん「それで、どっちの道を行ったらいいんだい？」

ウバウサ「よし、いくぞ、よーい、ドン！」

　ウバウサはススッと後ろに回りこみ、クラウチングスタートの体勢をとるやいなや、自転車に乗ったクーたんの背中に、ものすごい勢いで体当たりした。

　ドゴーン！

クーたん「う、う、うわっわわわわ！？」

　ものすごい衝撃を背中に受けたクーたんは、森の木々をかき分け、枝を折りながら、信じられないスピードで走って（飛ばされて）いった。

ウバウサ「か･･･加減は･･･したもの。」

ウバウサはちょっとやりすぎたような気がしていたが、口笛を吹いて誤魔化した。

第二十六話　とても長い一日４

　ヒューーーーーー

　ドカーーーン！

クーたん「ぐわわわわっ」

　それなりの時間すごいスピードで走った（飛ばされた）が何かに激突してやっと止まるクーたんと、クーたんの自転車。

クーたん「いててててっ。」

　立ち上がったクーたんは、多少の擦り傷はあるものの、大きなケガはしていないようだった。

　自転車を起こしてみると、不思議なことに自転車も、あの衝撃にも関わらず、埃で汚れてしまってはいるものの、傷一つ付いていなかった。

クーたん「さすが、魔法の自転車だな。」

　クーたんが、激突したのは、家の近くに立っていた大きな木。その家は、一度しか来たことのないフツウサの家だった。

クーたん「よかった。たどり着いた。」

　クータンは自転車をとめて、フツウサの家のドアをノックする。

クーたん「フツウサー、フツウサやーい！」

　反応がない。

クーたん「いない･･･みたいだ。」

　ガッカリして気が抜けてしまったクーたんは、フラフラと家の近くに立っている木のそばに行き、もたれかかる。

「なんで！なんで！知らない！わかんない！クーたんなんて、クーたんなんて、大っ嫌い！」

　フツウサの声が頭の中に響く。

クーたん「ごめんね･･･ごめんね･･･フツウサ･･･うっ、うっ･･･。」

　大粒の涙を流すクーたん。足元には金色のコインと、銀色のコインが一枚ずつ落ちた。

　木の下でしばらく泣いていたクーたんだが、空がだんだんオレンジ色になってきてしまった。

　クーたんは、暗くなる前に家に帰らないといけないと思い、自転車を押して、トボトボと歩き出した。

　黒く焦げるような自転車の車輪の後を辿って帰るクーたん。途中で、よくフツウサと歩いた河原の道にぶつかり、そこを進む。

　その道で一羽のウサギとすれ違う。

のろうさ「･･･こんにちは。」

クーたん「･･･あ、こんにちは。」

　疲労困憊のクーたんは、返す挨拶にも元気がない。

のろうさ「なんか･･･元気ないですね。」

クータン「うん･･･ちょっといろいろあってね。」

　のろうさには、今日のクーたんは今まで見たことがないほどに元気がないように思えた。

のろうさ「あの･･･。」

　そのまま、トボトボとすれ違っていきそうなクーたんに声をかけるのろうさ。

のろうさ「何があったのかわからないですけど、もし本当に困っているなら、駄菓子屋のガチャガチャ回したらいいんじゃないでしょうか？」

クーたん「ダガシヤ･･･？ガチャガチャ･･･！？･･･そうか！」

　のろうさの言っている言葉の意味を理解するのにいつもより時間がかかってしまったクーたんではあったが、駄菓子屋“だがしうまし”にあるワンダーガチャの存在をなんとか思い出すことができた。

クーたん「のろうささん、ありがとう、ありがとう！」

のろうさ「わわっ。冷たい！」

　自転車をその場に倒して、のろうさに駆け寄り、力強く握手するクーたん。

クーたん「それじゃ、行ってくるね！」

　一気に元気になったクーたんは、颯爽と自転車に乗って走り出し、あっという間に見えなくなってしまった。

のろうさ「何か･･･あったんですね･･･。」

　のろうさは、寒さで氷のように手が冷たくなってしまってるにも関わらず、それに気が付く余裕もないクーたんの事情を憂いた。

第二十七話　とても長い一日５

　小さくて古いが趣のある駄菓子屋、『だがしうまし』。

　シャーっと走ってきて、キーっと自転車をとめたクーたん。

　ワンダーガチャの前に立ち、両手を合わせる。

クーたん「お願いします、お願いします。フツウサの居場所を教えてください。」

　クーたんは、ワンダーガチャにすがるように話しかけながら、まずは、銀色の涙コインを入れて、ワンダーガチャを回す。

　ガチャ、ガチャ、ガチャ、

　ポンッ！

　出てきたカプセルを急いで開けてみると、モヤモヤッという煙とともに、黒い腹巻がでてきた。

クーたん「は、腹巻･･･。」

　とりあえず、クーたんは、素直にその腹巻を装着してみた。

クーたん「あ、暖かい･･･。」

　腹巻の暖かさになんだかクーたんは、ホッとしてしまった。

クーたん「お願いします。」

　少し落ち着いた声になったクーたんが、再びワンダーガチャの前で両手を合わせて祈る。

　そして、今度は金色の涙コインを入れてワンダーガチャを回す。

　ガチャ、ガチャ、ガチャ、

　ポンッ！

　クーたんが、出てきたカプセルを開けてみると・・・。

　ジャーン！

　なんだか安っぽい不思議な効果音と共に、不思議なハトが飛びだした。

ハト「私の名前は、ワンダーハトのマメ。宇宙のどこにいる相手にも、必ず手紙を届けてみせるよ。」

　ビシッと敬礼を決めている小さな一羽のハト。

クーたん「は、はぁ･･･。ワンダーハトのマメさん･･･。」

マメ「君、お名前は？」

クーたん「あ、あの、クーたんと言います。」

マメ「ほう、クーたんか。素敵な名前だね。私のことはマメちゃんと呼んでくれたまえ。」

クーたん「はぁ、マメちゃんさんですね。」

マメ「マメちゃんでいい！」

クーたん「は･･･はい。マメちゃん･･･。」

マメ「ふむ、よろしい。ところで、君には、手紙を届けたい相手がいるようだね。」

クーたん「手紙･･･？あ、そうだ。自分はフツウサを探しているんです！」

マメ「ふむ。事情があるのはわかるが、今日はもう遅い。家に帰ってゆっくり休んで、明日手紙を書くといい。私が、必ずその手紙をあなたの大事な誰かに届けて見せよう。」

　クーたんがハッとして周りを見渡すと、すっかり空は暗くなってしまっていた。

クーたん「そう･･･ですね。」

マメ「ときにクーたんよ。」

クーたん「はい。」

マメ「私も君の家に一泊させてくれないか。夜は冷えるのでね。」

クーたん「は･･･はぁ。」

　そして、クーたんと、マメはクーたんの家に向かうのであった。

第二十八話　とても長い一日６

～少し時間は戻って～

フツウサ「なんで！なんで！知らない！わかんない！クーたんなんて、クーたんなんて、大っ嫌い！」

　フツウサは泣き叫びながら山を駆け下りる。耳を塞いでいるフツウサには、クーたんの呼び止める声は聞こえない。

　全力疾走のフツウサ。涙で視界はボヤけて前が良く見えない。

　バキッ

　大きめの枝につまずいて転んでしまうフツウサ。しかし山の下り道で勢いがついているので、そのまま倒れ込まずに、クルッと一回転する。そして、そのままスピードを落とさず、走り去っていく。

　その様子をたまたま山道を散策していたメロウサが見かける。

メロウサ「フツウサ？何かの新しいスポーツの練習かしら。でも、泣いていたようにも見えたわね。」

　メロウサはしばらくのんびりと立ち止まって考える。

メロウサ「あっ、こんなところで立ち止まってる場合じゃないわ。早くのろうさちゃんに食べさせてあげるキノコを採って帰らなきゃ。昨日、本で調べたワライダケってやつを食べさせてあげれば、きっとのろうさちゃんもニコニコ笑ってくれるわ。」

　我に返ったメロウサは自分の目的を果たすため、山の茂みの中に消えていった。

　フツウサの涙も疾走も止まらない。鼻水で呼吸が苦しくなっているが、そんなこともおかまいなし。

月ウサギ一「いらっしゃーせー！」

月ウサギ二「いらっしゃーませー！」

　ワゴン車で月饅頭を移動販売している月ウサギ達。疾走のフツウサとすれ違う。

月ウサギ一「今のはフツウサかな？」

月ウサギ二「速くてよくわかんなかったです。」

月ウサギ一「追いかけて頼めば饅頭買ってくれるかな？」

月ウサギ二「なんか急いでたみたいだし、迷惑じゃないですか？」

月ウサギ一「今日のノルマってあと何箱？」

月ウサギ二「えーと、九箱です。」

月ウサギ一「朝から昼までで何箱売れったっけ？」

月ウサギ二「うんと･･･一箱です。」

月ウサギ一「はぁ･･･田舎帰りたい。」

　フツウサの涙はまだまだ枯れない。走って、走って、走っていくフツウサ。

　クーたんとよく一緒に歩いた河原の道を駆けていく。

　フツウサの視界は、涙でボヤけていて何も見えていないが、反対側から一羽のウサギが歩いてきているようだ。

ロップ「あ、あ、あああああああ。」

　ドゴーン！

　ロップと激突してさすがにひっくり返って止まるフツウサ。

　ロップも突き飛ばされて、ゴロゴロと転がってしまった。

ロップ「い、痛い・・・。」

　なんとか起き上がって埃を払うロップ。

ロップ「よ、よけられなかった・・・。」

　ロップが前から走ってきた何かとぶつかった地点におそるおそる近づいてみると、仰向けに倒れているフツウサを発見した。

ロップ「あ、あ、フツウサ！大丈夫！？フツウサ、フツウサ。」

　慌ててフツウサを揺さぶるロップ。

フツウサ「う、う、うえーん。」

ロップ「良かった。生きてる。どこか痛いの？フツウサ。」

フツウサ「痛い、心が・・・。」

ロップ「心？」

フツウサ「うえーん。クーたんに大嫌いって言っちゃったよー。」

ロップ「ちょっとフツウサ、落ち着いて。」

第二十九話　とても長い一日７

　フツウサは、とにかく誰かに話を聞いてもらいたくて、ロップを自分の家へと招いた。

ロップ（（ドキドキ、友達の家に来るのなんて初めて・・・。））

フツウサ「ロップさん、フツウサにはね、嫌なことがあると隠れる秘密基地があるんだ。クーたんも知らないんだ。クーたんといると、嫌なことが起こらないからね。ロップさんにだけ教えてあげるね。」

ロップ（（秘密基地、私だけに教えてくれる、秘密の共有、し、親友！？））

　ロップは鼻息を荒くしていた。

　フツウサの家の近くにある大きな木、その気の根元の草をちょっとかき分けると、木で出来た蓋が出てきた。

フツウサ「このフタを開けると、地下洞穴があるんだよ。」

　フツウサがパカッと木の蓋を開けると、その先には、小さな洞窟が広がっていた。

ロップ「す･･･すごい。本当に秘密基地みたいだ。」

フツウサ「うふふ。さぁ、中に入って。ちょっとフツウサと一緒におしゃべりしてほしいんだ。」

　二羽は小さな洞窟に入っていった。

ロップ「なんかあったの？フツウサ･･･。」

フツウサ「うん･･･。クーたんがね、クーたんがね･･･。」

　また、大粒の涙を流しだすフツウサ。

ロップ「あわわ、あわわ。」

　そのフツウサの姿を見てちょっと慌ててしまう。ロップ。

ロップ「そうだ！」

　ガサゴソと自分のカバンの中を探すロップ。

ロップ「ほら！」

　ロップの手には大きなドーナツがあった。

フツウサ「ドーナツ･･･。」

　涙と鼻水を流しながら、フツウサが反応する。

ロップ「今日は、駄菓子屋さんにドーナツを買いに行った帰りだったんだ。半分あげるね。」

　ロップは大きなドーナツを半分に割ろうとする。

ロップ「あっ。」

　ドーナツは綺麗に半分には割れず、大きなドーナツと、小さなドーナツにわかれてしまった。

ロップ「･･･はいっ。」

　一瞬の躊躇の後、大きい方のドーナツをフツウサに渡すロップ。

フツウサ「ありがと。」

　フツウサは涙をぬぐった後、ドーナツを受け取り、

フツウサ「はいっ。」

　大きめに割れたドーナツをキレイに半分に割って、その半分をロップに返した。

ロップ「あ、ありがと。」

　素直に嬉しそうにするロップ。

　二羽は幸せそうにドーナツを食べ、フツウサが持っていたお茶を分け合って飲んだ。

フツウサ「ふぅ。」

ロップ「お腹いっぱいになって、ちょっと落ち着いたかな。」

フツウサ「そういえば、昼のおにぎり食べかけのまま、置いてきちゃった。」

ロップ「それじゃ、お腹も空いてたのかもね。」

　少しのんびりしていた二羽。フツウサが、ポツポツと話し出す。

フツウサ「あのね、クーたんがね･･･。」

ロップ「うん･･･。」

フツウサ「お別れだっていうんだ･･･。」

ロップ「！？」

フツウサ「･･･ロップさん？」

ロップ「うぇぇぇん･･･。」

　泣き出してしまうロップ。

フツウサ「大丈夫、ロップさん、ロップさん！」

ロップ「お別れは、お別れは、悲しいよ･･･。」

フツウサ「･･･お別れは、悲しい･･･。グスン。」

　落ち着いて話始めたフツウサも、また大粒の涙を流して泣き出してしまう。

ロップ「うぇぇぇえん。」

フツウサ「わぁぁぁぁぁん。」

　小さな洞穴の中で泣きじゃくる二羽のウサギ。

　足元にはたくさんの涙コインが落ちていた。

第三十話　さようならを言った日１

　家に帰ったクーたんは、すぐにグッスリと眠った。

　冷たい風が吹く中、自転車をとにかくこいで、フツウサを探し回った。

　身体も冷えてすごく疲れてしまっていたが、ワンダーガチャから出た腹巻をしたまま寝たお陰もあってか、風邪はひかずにすんだようだった。

クーたん「･･･。」

　まだ暗い朝。静かに目を覚ますクーたん。布団の上で小さくなって寝ているハトのマメを起こさないように、そっと立ち上がり、机に向かい、手紙を書きだす。

～フツウサへの手紙～

フツウサへ、急にお別れだなんて言ってごめんなさい。びっくりしてしまったよね。お昼におにぎり山で待っています。自分の話を聞いてほしいんだ。誰よりも先にフツウサに。

クーたんより。

マメ「書き終わったかい？」

クーたん「あ、マメちゃん起こしちゃったかな？」

マメ「届けなきゃいけない手紙があるのなら、寝てなんかいられないさ。」

クーたん「ありがとう、マメちゃん。」

マメ「届け先を聞こう。」

クーたん「うん。･･･フツウサに、大事な友達に、この手紙を届けてほしい。」

マメ「了解した。」

　クーたんから受け取った手紙をくちばしに加え、ビシッと敬礼をしたマメは、窓からバサバサッと飛び去っていった。

クーたん「ふぅ･･･。もうひと眠り、しようかな･･･。」

　手紙をマメに任せたクーたんは、ちょっとホッとして、もう少し眠って外が明るくなるのを待つことにした。

　再び目を覚ますクーたん。窓から外を見ると、お日様が昇り始めていた。

クーたん「よし、元気だ！」

　クーたんはいつものようにおにぎりを二つ握って、布袋に入れ、いつものようにたくさんの他の物と一緒にリュックに詰めた。

クーたん「さて、遅くならないうちに出かけよう。」

　クーたんは、リュックを背負い、おにぎり山へと出かけて行った。

　おにぎり山の頂上。いつものように座ってフツウサを待つクーたん。次第にお日様が頭の上にまで昇ってきた。

　バキッ！

　後ろから聞きなれた、枝の折れる音が聞こえた。

フツウサ「やあ！」

　クーたんが振り返ると、そこにはいつもの笑顔のフツウサがいた。

クーたん「やあ！フツウサ。」

　フツウサはクーたんの隣にスッと座った。

フツウサ「ごめんね、クーたん。」

クーたん「ごめんね、フツウサ。」

フツウサ「フツウサは、お別れっていう言葉に悲しくなって、逃げ出しちゃったんだ。クーたんにバカって言っちゃった。クーたんはバカじゃないのに。」

　涙ぐみながら話すフツウサ。

クーたん「うん。お別れっていう言葉に悲しくなって逃げ出しちゃったんだね。バカっていう言葉も言っちゃったんだね。」

フツウサ「クーたんは、バカじゃないのに･･･。」

クーたん「クーたんは、バカじゃないのにね･･･。」

フツウサ「ごめんね･･･。」

クーたん「ごねんね、ねっ。」

フツウサ「昨日はロップさんと一緒にフツウサの秘密基地で大泣きしてたんだ。そしたらいつの間にか寝ちゃってて･･･。」

クーたん「ロップさんと一緒に秘密基地で大泣きして、いつの間にか寝ちゃってたんだね。」

フツウサ「そう。そして目が覚めたら、どこからか気合いの入ったハトが入ってきていてね、手紙をくれたの。」

クーたん「目が覚めたら、気合の入ったハトがいて、手紙をくれたんだね。」

フツウサ「クーたん、手紙ありがとうね。」

クーたん「うん･･･。また会えて、良かった。」

　少しの間、言葉を失う二羽のウサギ・・・。

第三十一話　さようならを言った日２

フツウサ「クーたん･･･お別れしなくちゃならないの･･･？」

クーたん「･･･聞いてくれるかい、フツウサ。」

フツウサ「･･･うん。」

　ふぅっと大きなため息をつくクーたん。

クーたん「星ウサギ種のウサギはね･･･。修業をして立派になったら、自分自身の星をつくるために宇宙に旅立つんだ。」

フツウサ「え！？クーたん、星をつくるの！？」

クーたん「うん。自分の星をつくるんだ。」

フツウサ「すごいね！クーたん。本当に優しい王様になるんだね！」

　目をキラキラさせているフツウサ。

クーたん「ふふっ。星をつくることと、王様になるってことはちょっと違うんだけどね。」

フツウサ「そうなのか...でも、でも、すごいねクーたん！」

クーたん「ありがとう。まぁ、初めての経験だし、まだどんな星をつくるか、細かいことは決めてないんだけどね。」

フツウサ「そうなのか･･･。細かいことは決めてないんだね。」

クーたん「うん。ほとんどのことは、宇宙に出てから決めようと思ってね。今決まっているのは二つのことだけなんだ。」

フツウサ「二つのこと？」

クーたん「そう。一つは星の名前。」

フツウサ「星の名前･･･。」

クーたん「ジェニュイン･･･。」

フツウサ「じぇにに。」

クーたん「いや、ジェニュイン。」

フツウサ「じぇにに。」

クーたん「うんとね、純真っていう意味の言葉なんだ。」

フツウサ「じぇににかぁ。かっこいいなぁ。」

クーたん「ありがとう。ジェニュインなんだけどね。」

フツウサ「クーたん、もう一つ決まっていることって？」

クータン「うん。もう一つはね、とにかく水の綺麗な星にしたいんだ。」

フツウサ「水の綺麗な星・・・。」

クーたん「そう。どんな繊細な生き物でも暮らしていけるような、すごく澄んだ水の溢れている星にしたいんだよ。」

フツウサ「すごく澄んだ水の溢れている星･･･。クーたんの毎日の修業はそんな星をつくるための修業だったんだね。」

クーたん「そうだね。自分が何を求め、何をやりたがっているかを思い浮かべ、考えているうちに、そこにいきついたんだ。」

フツウサ「やっと、わかったんだね。」

クーたん「うん。やっとね。だから、自分は宇宙に旅立つよ。」

フツウサ「クーたんならきっとできるよ。」

クーたん「ありがとう、フツウサ。」

フツウサ「･･･フツウサも行く。」

クーたん「･･･。」

フツウサ「フツウサもクーたんと一緒にじぇににをつくる。」

クーたん「フツウサ･･･。星をつくるっていうのはね、星ウサギとしての自分の宿命なんだよ。自分はね、フツウサにはフツウサの宿命っていうのがちゃんとあると思うんだよ。」

フツウサ「クーたん、一緒には行けないの？」

クーたん「･･･うん。ごめんね。」

フツウサ「そっか･･･。」

クーたん「･･･。」

フツウサ「クーたん、どうやって宇宙にいくの？」

クーたん「うん。実はもう自分専用のロケットをつくってあるんだ。星ウサギ秘伝の技術に自分なりの工夫を加えてね。」

フツウサ「そうなんだ。すごいね。そういえば、食料とかも少しずつ備蓄してたもんね。」

クーたん「うん。新しい星でちゃんと食べ物を調達できるかどうかはわからないからね。」

フツウサ「･･･そうだ、ワンダーガチャだ！駄菓子屋だがしうましの魔法のガチャガチャで、フツウサもクーたんと一緒に宇宙に行けるロケットを出せばいいんだ！」

クーたん「･･･ワンダーガチャの魔法のアイテムはね、そのウサギに今、本当に必要な物が出るんだ。今のフツウサがガチャガチャを回して、都合良くロケットが出るかな？」

フツウサ「出ない･･･かな･･･？」

クーたん「たぶん･･･ね。」

フツウサ「そっか･･･。」

クーたん「うん･･･。」

フツウサ「クーたんがそう言うのならそうなんだろうね。」

クーたん「･･･。」

　再び、言葉を失う二羽のウサギ・・・。

第三十二話　さようならを言った日３

フツウサ「クーたん･･･。クーたんは、宇宙で呼吸できるの？」

クーたん「え！？え！？星ウサギ種だから、たぶん大丈夫だよ、うん。たぶん･･･。大丈夫なはず･･･。」

フツウサ「いろいろわからないことばかりなんだね。」

クーたん「うん･･･。」

フツウサ「クーたん･･･。いつ出発するの？」

クーたん「うん･･･。まだ決めていないけど近々出発するよ。」

フツウサ「寂しくなるね･･･。」

クーたん「寂しくなるね･･･。」

フツウサ「クーたん、行かないで。」

クーたん「クーたん、行かないで･･･ね。」

フツウサ「違うの･･･。行って･･･。行っていいの。」

クーたん「フツウサ･･･。」

フツウサ「フツウサは、いつだってクーたんを応援したいよ。」

クーたん「ありがとう･･･。ありがとう、フツウサ･･･。」

　名残惜しい沈黙が続く。

フツウサ「･･･もう、行くね。」

　切り出したのはフツウサの方だった。

クーたん「あ、うん･･･。聞いてくれてありがとう、フツウサ。」

フツウサ「クーたんも･･･。聞いてくれてありがとう。」

クーたん「これ、今日も持って来たから。」

　リュックから布袋を出し、おにぎりをフツウサに渡すクーたん。

フツウサ「ありがとう。」

　優しく渡されたおにぎりをしっかり受け取るフツウサ。

フツウサ「それじゃ。」

クーたん「うん。フツウサ･･･、さようなら。」

フツウサ「･･･！･･･さようなら、さようなら、クーたん。」

　クーたんから初めて聞く、またね、じゃなくて、さようならという言葉。

　笑顔で手を振った後、クーたんに背を向け、おにぎりを大事に抱えながら走り出すフツウサ。

　一気に山を駆け下りる。

　そして、しばらく走ってクーたんからは完全に見えなくなったところでピタッと立ち止まる。

フツウサ「さようなら･･･クーたん、さようなら。」

　フツウサは大粒の涙を流しながら何度も、何度も、そうつぶやき、両膝をついた。

　おにぎり山の頂上で座っているクーたん。手に持っているおにぎりは、まだ一口も食べていない。

　その時、空からフワフワとうちゅうさが下りてくる。

クーたん「やぁ･･･、うちゅうさ･･･。」

うちゅうさ「･･･。」

クーたん「今日･･･、みんなに･･･、挨拶をすませて･･･、明日･･･、発つよ。」

うちゅうさ「･･･。」

　静かにうなずいたうちゅうさは、嗚咽をもらしながら、身体いっぱい涙になっているクーたんに、白いハンカチをヒ

ラヒラと渡した。

第三十三話　さようならを言った日４

　トボトボと歩いているフツウサ。自分がどこに向かって歩いているのかもわからない。

　長い耳はペタンと垂れ、涙で顔はグシャグシャ。何度も転んでいるので身体は泥だらけ。無事なのは両手で大事に抱えているおにぎりだけ。

　何にもつまづいてないのに、またペタンと倒れてしまうフツウサ。

　そのとき、不意にフツウサの頭の中にクーたんの声が響く。

「自分はね、フツウサにはフツウサの宿命っていうのがちゃんとあると思うんだよ。」

フツウサ「･･･フツウサの宿命。」

　倒れたまま、大事に持っていたおにぎりを一口食べるフツウサ。

フツウサ「おいしい･･･。」

　いつものように優しい味。

　急に身体に力がみなぎる。

フツウサ「フツウサの宿命！フツウサの宿命ってなんだーーーーーー！」

　フツウサは、とても大きな声で叫びながら立ち上がり、また元気に走っていった。

　同じ日の午後。

　古くて小さいが趣のある駄菓子屋、“だがしうまし”。

店主「やぁ、いらっしゃい。なきうさ。今日もドロップかい？」

　相変わらず店主はお客さんに姿を見せずに対応している。

なきうさ「こんにちは、店主さん。今日はちょっとお話を聞いてもらいにきたの。」

店主「どうしたんだい？」

なきうさ「あのね、クーたんがね、宇宙に旅立ってしまうんだって。」

店主「うん。そうみたいだね。」

なきうさ「店主さんは知っていたの？」

店主「まぁね。それにクーたんは、さっきここにも挨拶にきたからね。」

なきうさ「そっか･･･。」

店主「うん･･･。」

なきうさ「私ね、クーたんの旅立ちのお話を聞いたとき、とても寂しい気持ちになったの。」

店主「うん。とても寂しい気持ちになったんだね。」

なきうさ「そう。だけど、それと同じくらい強く、なんだか悔しい気持ちにもなったんだ。」

店主「その寂しい気持ちと同じくらい強く、なんだか悔しい気持ちにもなったんだね。」

なきうさ「そうなの。クーたんは、自分の宿命、自分のやりたいことがわかっているって･･･。そして仲間達と自分の意志で別れて、旅立つことができるんだって･･･。すごいなぁって。私にはそういう強い目標みたいなもの、なにもない。」

店主「なきうさには、クーたんのような強い目標がないんだね。それが悔しい･･･。」

なきうさ「クーたん泣いてたけど、なんかキラキラして見えた･･･。」

店主「なきうさには、クーたんがキラキラして見えたんだね。」

なきうさ「うん･･･。なんか･･･いいなぁって。」

店主「なんか･･･いいなぁ、ってね。」

なきうさ「私なんて、泣いてばかりだし。」

店主「私なんて泣いてばかり、なんだね。」

なきうさ「うん･･･。」

店主「なきうさ･･･今は、泣いてないようだね。」

なきうさ「･･･あれ、ほんとだ。涙が止まってる。」

店主「･･･不思議だね。」

なきうさ「私って泣かずに話すこともできるんだ･･･。」

店主「これから、まだまだ新しい自分に出会っていけそうな感じだね。」

なきうさ「新しい自分に出会う･･･か。」

店主「ふふっ。」

なきうさ「ありがとう、店主さん。なんか聞いてもらってちょっとスッキリした。」

店主「そうかい。」

なきうさ「せっかく来たからドロップ買っていくね。」

店主「はい、毎度どうも。お代の笑顔コインはそこの箱の中に入れておいてね。」

なきうさ「うん。それじゃね、店主さん！」

　ドロップを一缶買って帰るなきうさ。足取りはどこか軽やかだった。

第三十四話　旅立ちの日１

　旅立ちの日。

　クーたんは、いつもたくさんの物が入っているリュックに、より一層必要な物を詰め込んで背負い、黒い腹巻をして、オシャレなオレンジの帽子をかぶっていた。

クーたん「準備万端。」

　家の庭にはお手製のロケットがあり、既に発射準備ができている。

　その時、空からフワフワとうちゅうさが下りてくる。

クーたん「やぁ！うちゅうさ。もう出発するよ。今までありがとうね。」

うちゅうさ「･･･。」

クーたん「みんなの見送りは断ったんだ。泣きながらロケットを発射したら、座標を間違えちゃうかもしれないから。」

うちゅうさ「･･･。」

クーたん「さて、出発だ！」

うちゅうさ「･･･目標座標は？」

クーたん「え？」

うちゅうさ「途中まで一緒に行ったるで。初めての宇宙でいろいろ不安やろ。」

クーたん「あ、あの･･･カントウと呼ばれている座標に行こうと思います。」

うちゅうさ「なんや、意外と近場やな。」

クーたん「はぁ、すいません。（（うちゅうさ、しゃべれたんだ･･･。））」

　クーたんは、ロケットに乗り込み、動力部にジョイントした黒い自転車にまたがる。

うちゅうさ「ほな、行こか。」

　先にフワフワと空に舞い上がっていくうちゅうさ。

クーたん「よし、ロケット発進だ！」

　クーたんは、一生懸命自転車をこぎだす。

三、二、一、発射！

ロケットは大きな発射音を鳴らしながら飛び立った。

クーたん「みんな、行ってくるね。」

ヒューン、ゴゴゴゴゴッ

燃料のクローバーの葉を舞散らしながら、順調に飛び立つロケット。

あっという間に大気圏に突入する。

クーたん「よし、宇宙はすぐそこだ。」

ポロポロッ

クーたん「あれっ？」

クーたんのロケットの部品がどんどん外れていく。

初めてつくったロケットは、どうも住み慣れた星を飛び出すのに十分な耐久度をもちあわせていなかったらしい。

クーたん「これは、困ったな。」

小さくつぶやくクーたん。そして次の瞬間・・・。

ドーーーーン！

なんとクーたんのロケットは大気圏突破に耐えらず大破してしまった。

うちゅうさ「なんでやねーーーーん！」

近くを並走していたうちゅうさも大破したロケットの爆風に吹き飛ばされてしまった。

第三十五話　旅立ちの日２

　同じ頃･･･。

　タカタカと走っているフツウサ。

　今日の目的地は古くて小さな趣のある建物、駄菓子屋“だがしうまし”の外に置いてある、ワンダーガチャである。

　フツウサは鼻息荒く、ワンダーガチャの前に立つ。頭には必勝と手書きで書いたハチマキをしている。

　手に持っているのは銀の涙コイン一枚と、金の涙コイン二枚。

フツウサ「絶対、良いのを当ててやる。」

　フツウサはまず銀の涙コインを入れてガチャガチャを回す。

　ガチャ、ガチャ、ガチャ、

　ポンッ

　出てきたカプセルを開けると、モヤモヤッという煙とともに、モサッとした眉毛とでっかいお鼻がついた、パーティー用のジョークメガネがでてきた。

フツウサ「なにこれ？かわいくない。」

　フツウサが、ポイッとメガネを放り投げると信じられないスピードで何者かがそのメガネをキャッチする。

フツウサ「次が本番･･･。」

　フツウサは一枚目の金の涙コインをガチャガチャにセットする。

フツウサ「ゴクリ･･･。」

　ガチャ、ガチャ、ガチャ、

　ポンッ

　フツウサが、出てきたカプセルを開けてみると・・・。

　ジャーン！

　なんだか安っぽい不思議な効果音と共に、一冊の分厚い本が出てきた。

フツウサ「なんだこれ･･･。えっとパーフェクトロケットづくりマニュアル･･･。」

　フツウサが手にしたのはパーフェクトロケットづくりマニュアル。宇宙に飛び出すロケットのつくり方が、丁寧にわかりやすく書いてあり、努力すればウサギにでも必ずロケットがつくれるようになるという不思議な本。

フツウサ「クーたん、フツウサはね、自分の力できっと宇宙に会いに行くよ。きっとそれはフツウサの宿命でもあると思うんだ。」

　フツウサは持って来たちょっと大きめのカバンに、パーフェクトロケットづくりマニュアルをしまう。

フツウサ「さて、次が最後だ。」

　フツウサは二枚目の金の涙コインをガチャガチャにセットする。

　ガチャ、ガチャ、ガチャ、

　ポンッ

　フツウサが出てきたカプセルを開けてみると･･･、

　パンパカパーン！大当たり！

　どこからか豪華な効果音が聞こえ、カプセルからは花吹雪と共に一本の筆がでてきた。

フツウサ「な、なんだこれ！？」

筆「私は魔法の筆だわよ。これからあなたの一部となって、素敵な素敵な絵をたくさんたくさん描くだわよ。」

フツウサ「うわ、しゃべった。」

筆「テンション低いだわね。あなたはユニークアイテムを引き当てただわよ。もっと喜ぶだわよ。」

フツウサ「ユニークアイテム？」

筆「そう。ユニークアイテムはその人の宿命に深く関係したアイテムだわよ。きっと私は、あなたがあなたの宿命を全うするのを助けるだわよ。」

フツウサ「フツウサの宿命はロケットつくってクーたんに会いに行くことだもん。あなたは関係ないもん。」

筆「宿命は自分で決めるもんじゃないだわよ。」

フツウサ「あなたが決めるものでもないでしょ。」

筆「･･･まぁ、いいわ。とにかくこれからはずっと一緒だわよ。一緒にたくさん絵を描くだわよ。」

　魔法の筆はヒュンとフツウサのカバンの中に入り込む。

フツウサ「あ･･･。」

　入り込んだカバンから、ちょっとだけ顔を出す魔法の筆。

筆「私、名前がほしいだわよ。」

フツウサ「名前･･･。」

「ウサギさん・・・。君は誰ですか？」

「わ、私は、ウ、ウ、ウサギです。」

「お互いに名前を付けようよ。あなたの名前はクーたんね！」

「ウサギ、普通、フツウ、ウサギ･･･それじゃ、フツウサっていうのはどうだろう？」

　フツウサにちょっとだけ昔の記憶が蘇り、一筋の滴が頬をつたう。

フツウサ「えんちゃん。」

筆「えんちゃん？どういう意味だわよ？」

フツウサ「えんかんた。クーたんにいつか教えてもらった言葉。意味は忘れちゃったけど、好きな響きの言葉なんだ。だから、えんかんたのえんちゃん。」

えん「えんかんた･･･？ああ、エンカウンター、遭遇という意味の言葉だわね。うん。良い言葉、良い名だわね。気に入っただわよ。あなたも早いとこあなたの宿命と遭遇できるといいだわね。」

フツウサ「だから、フツウサの宿命はクーたんに会いに宇宙に行くことだってば。」

えん「ふぅっ･･･。もう、別に今はそれでもいいだわよ。」

フツウサ「よいしょ。」

いつもよりちょっと大きめのカバンを背負うフツウサ。

ふと空を見上げると、まだ昼なのに、キラッと一筋の星が流れるのが確かに見えた。

フツウサ「クーたん･･･元気にやってる･･･よね。」

第三十六話　またね

　フワリ、フワリ、フワリ、フワリ、

　空から帽子が落ちてくる。

　オレンジ色のおしゃれな帽子。

　フワリ、フワリ、フワリ、フワリ、

　着陸したのはクローバーの丘。

かいぞうさ「あれ･･･？」

　クローバーの丘の害虫駆除をしていたかいぞうさが、すぐに気が付く。

かいぞうさ「これは･･･クーたんの帽子･･･だよな。」

　かいぞうさがヒョイっとその帽子を拾うと･･･。

かいぞうさ「あら、珍しい。今年は初めて見るな。」

　オレンジ色のおしゃれな帽子の中には四つ葉のクローバーが一枚入りこんでいた。

かいぞうさ「今日も、良い日になりそうだな、クーたん。」

　スッとオレンジのおしゃれな帽子をかぶり、かいぞうさは空を見上げながらつぶやいた。

空

空

空

まだそんなには遠くない宇宙・・・。

「負けるもんかー！」

一羽のウサギが黒い自転車で、宇宙を走っている姿があった。

星のクーたん　　完

とおくとおくにはなれていても

だいすきなやまで

だいすきなおにぎりをたべながら

だいすきなともだちと

たわいのないおはなしをするゆめをよくみます

「また、きっとあえるね。」

「また、きっと会えるさ。」

ジェニュイン黒田

星のクーたん（小説）

http://p.booklog.jp/book/111583

著者 : ジェニュイン黒田
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/ku-tann/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/111583

電子書籍プラットフォーム : パブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社トゥ・ディファクト